
フレイアの娘

藍沢 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フレイアの娘

【Nコード】

N0960Q

【作者名】

藍沢 要

【あらすじ】

王の花嫁候補を異世界から召喚したはずが、なにやら変わったお方を召喚してしまったようだ…。あれ、俺達、なんかすごい呼んじやったんじゃないの？

ジャンル変更しました

01:プロローグ

えーっと。

ここはどこかしら？

どうして、こんなにあたしの周りに人がいるのかな。

ていうか、初対面だけと言っちゃっていいかな。気になるんだけど。

「変な服」

あれ、これ地雷だったのかしら？

なんかものすごく青筋立ってるような気がするわ。

だっておかしな服着てるんだもの、口に出しちゃうでしょうよ。

大体なんなの、そのズルズル裾の長いローブみたいなもの。

あんた男だよねえ？そうよね？どこからどう見ても男よね。その青

いアゴ見りゃわかるわよ。寄らないでよ、キモイわ。

うつわ、袖から出てる腕毛…。あたし体毛濃い人って苦手なのよね。

かといって女以上にツルツルなのも嫌だけど。

「この女が召喚された花嫁候補か？」

はあ？

あれ、他にも人がいたのね。

ていうかー！！

召喚ってまさか召喚？じゃあここ異世界？うわ、なんかテンション上がるんですけどー！！

ママー！！あたし異世界トリップしちゃったー！！凄くない！？この世界魔法とかあるわけ？あたしも使えるの？だったら、空飛びたいー！！

え？魔法が使える世界じゃない？は？そんなのアリなわけ？召喚出来たんなら、魔法使えるでしょうよ。なんなの、その中途半端な感じ。なんかその半端さに腹立つんですけど。責任者出て来い、こらあー！！

あたしはクレーマーじゃないけど、これにはクレームつけていいですよ！？

え？魔獣はいる？嘘ー、超見たいんですけどー！乗れたりするの？え？出来る？きゃー！！あたし専用の魔獣ちゃんほーしーいー！！！！

あ。

つか、花嫁候補って何よ。花嫁じゃないのね。候補って何よ、候補って！！

じゃあ、候補から外れたらどうすんのよ。え？好きに生きていいって？

はっ！バカじゃないの、あんた達。いかにも世間知らずよね。この世界の事を何一つ知らないのに、いきなり予告も無しに召喚されてはい、候補からあぶれました。じゃあ好きに生きてくださいなんて、じゃああんたが逆にあたしの世界に行ってみなさいってーのよ。

そんな趣味の悪い服なんか着てたら、確実に警察に職務質問されて、「はいはい、わかったから、名前教えてねー」って軽くあしらわれて、最悪派出所に連れて行かれるんだから。

うーけーるー！！

「お前のような女なんか絶対花嫁に選ばない」

うつるせーよ!!

あたしにだって選ぶ権利あるのよ!! つーかあんた誰だよ!!

「余はこの国の王だ」

ふーん。そうですか。

反応薄いなって? いや、展開読めれば普通わかるでしょ。バカじゃないんだから。

つーか、あたしのタイプじゃないし。いくらプラチナブロンドの髪に蒼い目って言われてもねえ。はいはい、天に授けられたようなルックスですよ。お綺麗ですこと。

でもね? あたしのタイプは蝶野さんの!! ゴリマッチョ大好きなの!! あんたじゃ細すぎるのよ!! 鍛え直して来い!!

あー、もう疲れたー。

寝たいんですけどー。

「お前は一体どうしたい。余の花嫁には選ばぬ故、好きに致せ」

うわ、上から目線。カティーンですよ、あたし。

うーん。好きに、か。じゃあ…

「あたしを激戦地に行かせてください」

さあ、血が湧くわあ！！

02：変わった花嫁候補

だから反対だったのだ。

最後の花嫁候補を異世界から召喚するなど。それが、召喚長に泣き付かれて、仕方なしにやってみたらこれだ。

召喚された女は、きょとした顔でこちらを見ている。

おや、眼の色が両方とも違うではないか。右は茶色で左は碧あおか…。左右の眼の色が違うのは、こちらの世界では酷く珍しく、大概その持ち主は全ての能力が高いとされている。事実、この国を創った初代王は左右の眼の色が違ったらしい。

眼を見て浮き足立ったのは、召喚長だ。どや顔をして余を見ている。鬱陶し…。いや、よくやってくれた。

女の髪は茶色。スラリとした長身の背中の中頃にかかるほどの髪は真っ直ぐで、少し濡れているのか、多少水滴が垂れている。

こちらを黙って見ている女の顔は、間違いなく美人だ。

ほう、これはこれは。大陸一の美女と言っても過言ではないな。他の候補より一步も二歩も優れている容姿は、異世界から来たと言っても国民は諸手を上げて祝福するかもしれない。

だが、そんな前向きな事は女が口を開いた瞬間、脆くも崩れ落ちた。

一体何だ、この女！

「変な服」

第一声がこれだぞ！？

普通だったら、「ここどこ？」とか聞くだろ！しかも、第一級礼装をしている召喚長の服装を^{けな}貶したばかりか、「体毛の濃い人、寄らないで。キモイから」だと！？

一体お前は何様なんだ！！

余も気になっていたが、流石に個人の身体的特徴に嫌悪を表すのは、王として…と言うか、人として間違っているだろう。

それなのに、それなのにだ！！お前は綺麗に跡形もなく召喚長の濃すぎる体毛問題を口にしたな！？

見る！繋がっている眉毛が見事な成層火山型を作ったではないか！

「この世界って魔法使えないの？召喚まで出来るんだから、魔法使えないなんてアホなこと言わないわよね？」

ひくつと宰相の口元が歪んだ。

そう、この世界は召喚は出来るのだが、肝心の魔法は存在しない。そこには些か自分も疑問を感じてはいるが、まあ世の成り立ちだと思つて深く考えたりはしなかった。

なのにだ！！あの女ときたら、不平不満を並べ立てた。仕方ないだろう！ないものはないのだから！！

魔獣は存在すると教えてやったら、わかりやすく機嫌が直った。なんと現金な…。しかし、魔獣は決して人間と交わらない。孤高の生き物なのだ。なんだと！？乗ってみたいだ！？お前なんか乗る前に食われて終わりだぞ！！王である余ですら、内心ヒヤヒヤしながら乗っているのに！

おい、宰相、お前今面倒くさいから丸投げにしたな？「乗れるなら乗って下さい」なんてどっちにも取れる言葉選びをするなよ。

「で？花嫁候補って何なのよ。まさかあたしが花嫁候補なわけじゃないわよね？あたしムーリ！こんな趣味悪い男の嫁なんて絶対無理！」

こっちのセリフだっ！

誰がお前なんかを王妃に選ぶか！！貴様なんぞ選んだ日には、歴代の王から草場の影で総ツツコミが来るに決まってる。

大体、お前の方が趣味悪いではないか！

何だ、その服装！ほとんど裸ではないかっ！お風呂入った後だったんだからしょうがないじゃないと言われればそれまでだが、脚はほとんど丸見え、上半身も薄い布切れで申し訳程度に覆われているだけだ。『しょーぱん』に『きゃみ』って言われても、余には夜着よりも布が少なく見えるが？

見ろ、初^{うぶ}な奴らは真っ赤で俯いているではないか。

「まさかあんな童貞なわけじゃないわよね？なわけないかあー。そんな顔でハジメテなわけないわよね」

…絶対こいつは選ばない…。

早々に候補から外しても問題はないだろう。

だが、異世界から召喚した女だ。ぎゃーぎゃー騒いでるのもあるし、手厚く保護してやるか。

余から遠く離れた所で。

「じゃあ、あたしを激戦地に行かせて下さい！」

可哀想に…。

頭がおかしいらしい。

03：異世界の世界情勢

「激戦地に行かせて下さい」

あたしの周囲を取り巻く人たちの空気が凍ったと思ったら、次の瞬間、どつと爆笑の渦に包まれた。

王様のボディーガードみたいな屈強な男たちなんて、腹抱えて笑ってるし。失礼な。

その中の一番偉そうっていうか、強そうな人がずっとあたしの目の前に立った。175cmあるあたしでも見上げるだけの長身だ。きつと190近くはあるんだろうな。

あー、あたしもヒール履いてりゃ見下ろされずにすむのにー。

「あー笑った笑った。お嬢さん、激戦地って…どんな所か知ってるか？」

「当たり前じゃない。だから言ったんだけど。あたしは自分が実行出来ない事は口にしない主義なの。」

「だったら、余計に。あんたは召喚された王の花嫁候補だ。それにあんたは女。戦場に出させるわけにゃいけないだろ。」

何それー。男女差別はんたーい！

「頭弱いよね、あなた。可哀想に。」

あら、顔がひきつったわよ。まだまだ修行が足りないわね、ぼ・う・や

「あたしは花嫁候補だって言うけど、王様直々にその権は免除されたわけよね。そうでしょ？」

「ああ。お前が王妃になんてなったら、国民がむせび泣く派目になるのは目に見えてる。」

「あら、歓喜にむせび泣くのよ。わかってないわね。で、話は戻すけど。花嫁候補から外れた異世界人のあたしの処遇はどうするか。目下の問題はそこでしょう？まあ、ここから遠からず、近からずの場所に送られるんだろうけど、それで暮らして行くには働かなきゃいけないし。ただ漠然と暮らすなんて、税金の無駄遣い以外の何者でもないでしょう？まー、ここに生物工学の研究室とか、製薬会社なんかがあつたらそこであたしの素晴らしい頭脳を発揮出来たんだけど、ないでしょ？あるわけないわよね、召喚ができるくせに魔法が使えないへつぽこな世界なんだから。だったら、あたしが出来ることって言えば戦場での大活躍！しかないわけよ。わかった？」

「いや、全く……」

「はー…頭の回転をちよつとは働かせなさいよ。ちゃんとシナプスが神経伝達物質運んでるでしょ？ちゃんと受動しなさいよね。ねえ、そのの！あんたよ、あんた！！その王様の隣に立つてる無駄に顔がいい男！そう、あんたよ！！あんたが、王様の次に偉そうだから聞くけど、この世界の情勢ってどうなってるわけ？まさか大陸

全般に平和ですって事はないんでしょ？」

無駄に顔がいいって言うのは語弊じゃない。王様には劣るけど、この人だって立派なイケメンだ。趣味じゃないけど。

「は…はあ。確かに大陸全てが平和と言うわけではございません。ここより南の国では、内乱がございますし、西では後継者問題が国際問題にまで発展しておりますから…」

「ほらー、異世界でも平和って尊いものなんでしょ？じゃああたし一人がその平和活動する事に依存はないじゃない。それに、異世界人のあたしが死んでも、あなた方には痛くも痒くもない、単なる些細事なはず。だったら、いい厄介払いになるんじゃない？」

につこりと周りに花まで撒き散らしながら微笑んでやった。実際、撒いたわけじゃないけどね。

「それに、あたし、こう見えても修羅場の数はくぐってきてるからね。そう簡単には死なないわよ。死ぬ気もないし」

「いいだろう。戦地に行くがいい。ただ、すぐにはダメだ。」

「ああ、他の候補たちとの顔見せとか？別にすぐ居なくなるんだから、そんな面倒くさい事なくていいのに。あ！あたし魔獣ちゃん欲しいのよね！何処にいるの？」

「ガツシュの森だ。」

ガツシュの森ね！よし、思い立ったが吉日！今すぐ捕獲しに行こう！
って、さっきの筋肉質のボディーガードが通らせてくれない。ちょっとー邪魔なんですけど？

「ねえ、どいてくれる？今からそのガツシュの森とやらに言って、
魔獣ちゃんを捕まえてきたいんだけど。」

「捕まえたいんなら、俺を倒してから…ぶっはあ！！」

「邪魔しないでくれる？それとも何？あんたドM？このまま踏まれてたい？」

掴みかかってきた筋肉質を四の五の言わずに、関節技をかけて投げ飛ばし、ついでに踏みつけてやった。

いやーん、弱いよね。ピンヒール履いてないのが、惜しすぎる！
あれ、でもなんかうつとりした目で見られてるわね。キモいわ。真面目にドM？しかも、羨ましそうな目で見てる人たちがそこにいるし…ちよつと、この国大丈夫？

「あ…あの！！とりあえず、今日は遅いのでお休みになられてから、
明日詳しい事を決めると言うことで如何でしょう！」

王様の次に偉そうな男…面倒くさいので次郎さんでいいや。ちなみ

に、王様は太郎ちゃんね！！
次郎さんがま、それもそうね。っていう提案をしてくれたので、大人しくそれに従うことにした。

あ、踏みつけてたマッチョメンは手を差し伸べて、起こしてあげましたよ。あたし、優しいからさっ！

04：侍女は美女（前書き）

せくしゃる的表現が少しだけあります。温いですけどね。

04：侍女は美女

てくてくと自分の部屋に案内されていると、マツチヨメンがふわつと何かを羽織らせてくれた。

「ん？マントっぽいけど、上着？お風呂上りとは言え、キャミにショ―パン姿じゃ寒かったのよね。風邪ひくの嫌だし。

とりあえず、感謝の言葉は必要よね。」

「ありがとう。あなた寒くないの？」

「いや、大丈夫だ。俺をあんなに足蹴にして感じさせてくれた女はあんただけだ。王の花嫁候補じゃなくなるんだったら、俺の嫁になつてくれな。」お断りするわ「…即答されると傷付くんだが…」

「あたしの知ったことじゃないわ。」

「ごめんなさいね、私これでも手加減してるのよ。」

「あら、やっぱりうつとりしてる。…正直にキモイって言ってあげた方がいいのかな。なんか太郎ちゃんも次郎ちゃんも、最初の頃から比べたら、マツチヨメンを見る目が変わってきてるように思えるんだけど。」

「わたくしが貴女様の侍女を務めさせていただきます、ヴィクトリアと申します。なんなりとお申し付けくださいませ。一生懸命務めさせていただきます。よろしくお願いします。」

部屋に着くなり紹介されたのは、私の専属の侍女だというヴィクトリアっていう女の子だった。

うわっ！すごい美人！！この子が王の花嫁候補になってもよかったんじゃないの？王宮に侍女で上がってるって事は、一応この子はこの国の貴族の娘でしょ？行儀見習いで上がってるんじゃないの？

「左様でございます。私の実家は子爵の位を授かっておりまして…
ってどうかいたしましたか？」

美女があたしに向かって首を傾げている様子を見て、もう我慢が出来なくなつた。

「きゃー！！美女ー！！しかもあたし好みいゝ！！！！！！」

「えっ！？きゃああ！！姫様！お止め下さいませ、後生でござ…っ
！！…はあんっ！」

「あら？…どうしたのー？可愛いほっぺが染まってきたわよお。」

「あっ…やつ！姫さ…っ！あんっ！」

「可愛いわあ、ヴィクトリア…。このまま食べちゃいたい…。」

もう押し倒しちゃってもいいよね。よし、あたしがこのルールだ
っ！

「ヴィクトリア…ベッド行かない？もつと気持ちよくしてあげる。」

「…姫様あ…。」

潤んだ瞳で縋り付いてくるヴィクトリアをくすつと笑って、そのまま彼女の頬を優しく包んで、熟れて美味しそうな唇を貪ろうとしたら…

「待て待て待てええい！！！！！！」

ちっ！！

邪魔すんじゃないわよ！！

大体何？そのク。ールカップスूपのCMみたいな出方！ちなみにあたしは、生パンでもいいと思うわ。ていうか、生パン派よ。傍目にもわかるように不機嫌な態度で、声がする方向を見た。

太郎ちゃんと次郎さんは啞然とした表情であたし達を見ているし、マッチョメン以下は前屈みで真っ赤っかだ。

ふっ…。何をおったててるんだか…。

「お…お前一体何をしようとしていた…。」

「見てわかんない？ヴィクトリアと愛のまぐわ「言わんでいいっ！

！」「あら、そう？」

「お前…同性がいいのか…？」

「うーん。当たらずとも遠からずってとこね。よく聞きなさい。あたしはバイなの！愛は性別を越えるのよ！！」

ぐつと腕に力を入れて、天に突き出した。

次郎さんはよよつてな感じで後ろによるめいた。あら、若いのに膝が弱いのか？水が溜まってるのかしら。注射針があれば、あたしが抜いてあげるわよ。ついでにヒアルロン酸入れてあげたいわね。

「…ばい…？ばいとは…？いや、言わんでいい。大体わかるから…。それよりも…お前はいい加減ヴィクトリアの身体から手を離せ！！」

「えええ？せつかくいい感じに身体が染まってきたのにい？ねえ、ヴィクトリア？」

「…やっあんっ！わ…私…もう立っていられな…ああんっ！」

「おいつつ！……！！！」

何よお。

そんなに怖い顔しなくてもいいじゃない。

あんまりうるさいもんだから、しぶしぶヴィクトリアの柔らかい胸から手を外して、近くにあるソファに座った。

もちろん、ヴィクトリアはあたしの膝に座らせただけだね。

04：侍女は美女（後書き）

私は付けパン派。

05: What your name?

「そう言えば、あんた達の名前って聞いてなかったわね。」

ヴィクトリアを膝に抱えたまま、不機嫌そうに睨んでいる太郎ちゃん目の前に座っちゃってるあたしは、そう言えばこの世界の基本的な事を全てすっ飛ばしている事に気付いた。
次郎さんなんか、ようやくまともな事を聞いてくれた！と安堵しているようにも見えるし。

「ようやく自己紹介ができるのか…ここまで来るのが長かったように思えるな…。余の名前はタロヒュージ・クロード・オーデインだ。お前が召喚されたこの国、ヴァルハラ王だ。」

「…オーデイン？ヴァルハラ？北欧神話の？」

「ほくおうしんわ？何だ、それは？」

「あたしの世界では、国によって世の成り立ちが違っただけどね。世の成り立ちが違っってことは、信じてる宗教も違っわけよ。大まかに分けると4宗教かしら。ま、あくまでも大まかだから、他の宗教もあるのよ。で、さっきの話に戻るけど、北欧っていう地域の神話の絶対神が『オーデイン』なの。で、『ヴァルハラ』っていうのは、世界がラグナロクで終焉を迎える時のために『ヴァルキリー』っていう女の戦士達に死んだ勇者の魂を集めさせてるのよ。その死せる勇者達が住むのが『ヴァルハラ』。」

「ほう…。では、余の名前は神なのか？」

うわぁ、うざいわね。なんかニヤニヤしてるもん。

だいたいタロヒュージって…。あたしが適当にあだ名付けた太郎ちゃんと変わらないじゃない。

「そうね、同じみたい。太郎ちゃん、嬉しそうね。」

「たる…随分初対面で砕けられたな…。まあ良い。その『オーディン』とはどんな神なのだ？」

「…ねえ、ヴィクトリア。お茶を用意してくれないかしら？喉渴いちゃった。」

「はい、姫様。」

うつとりしているヴィクトリアの頬を一撫でして、膝から解放する。心なしか、ほつとしてる雰囲気とするのは気のせいかしら？

「オーディンの講義をしてあげたいのは山々なんだけど、その前にその周りの人達の名前も教えてもらえないかしら？気がきかないわね、太郎ちゃん。」

太郎ちゃんの額にビシツと青筋がたったけれど、そんなのはあたしには知ったこっちゃない。

ヴィクトリアが煎れている紅茶のいい香りがして、かなりリラックス

ス状態。この香りはダージリンね。

「ねえ、その偉そうなあなたは？」

「偉そ…っ！ごほっ、失礼…。私はジローリアス・ツアラトウスト
ラ。ヴァルハラ宰相を務めております。」

「次郎さんね。次、さっきあたしに投げ飛ばされたあなたは？」

「くっ…！俺は、陛下の近衛隊長をしているマクシマス・チャネル
だ。こっちが部下のアイロンとファイス。」

「ふうーん。よろしくね。って言っても、あたしはすぐ戦地に行く
から、本当に顔見知り程度って事になっちゃうわけだけどね。」

お茶の準備が着々と整う中、足を組んだ。
いちいち目を逸らさなくていいんだけど。別に裸じゃないんだから。
って言っても、あたしは裸見られたぐらいじゃ別にどうって事はな
いけど。

「ところで、お前の名前は？余達が自己紹介したところで、お前の
名を知らぬのは些かおかしくないか？」

「ああ、そうね。うーん…この世界が北欧神話に準したがっているんだっ
たら……」

北欧神話かー。ヴァルキリーのブリュンヒルドでもいいけど、彼女はあたしの好みじゃないのよね。愛しのシグルズに裏切られたと思って殺しちゃった後で、私の身を焼き滅ぼすなんてねえ。んーだったら、やっぱり彼女だわ。

「『フレイヤ』。あたしの本当の名前は違うけど、神話に則れば、フレイヤがあたしにはぴったり。」

「フレイヤ？」

「そう、フレイヤ。愛と美の女神で、ヴァルキリーの長。死と破壊をも好む性格してるのよ。それでもって、オーディンの愛人。ね？あたしにぴったり！」

「愛人って何だ！ー！お前花嫁候補でも無くなるのに、まさか龍姫になりたいのか！？」

あらあら、大噴火だわ。全く、細かい男ね。次郎さん達はまたまた啞然としているし。

何よー。

「別に太郎ちゃんの愛人になりたいわけじゃないわよ。全くいちいちうるさい王様ねえ。」

「だいたいフレイヤ？こちらでは、聖なる泉を守護するの女神の名前だぞ。それを名乗るのは不遜に当たる。」

「まさか、その泉の名前って『ミール』じゃないわよね？」

言葉に窮するギャラリーを見て、大袈裟に溜め息を付いた。

ミールなのね。

どうやらこの異世界は北欧神話に彩られているらしい。だったら、ユグドラシルとかあってもおかしくないかも。

「だったら…フレイアにしようかしら。そうね、そうするわ。これからフレイアって呼んでね？」

につこり笑って、誰にも有無を言わせない。

そうこうしている間に、ヴィクトリアのお茶の準備が出来たみたいね。

カップが目の前に並べられて、^{かぐわ}香しい紅茶の香りがふわりと辺りを包む。

ちなみにあたしは、紅茶よりもコーヒーの方が好きなんだけど、まあこの際文句言ってられないし。

飲もうとカップを持った所で、ぐったり肩を落としている皆を見た。

「あれ、太郎ちゃん、飲まないの？美味しそうなダーズリンじゃない。」

「…ああ…そうだな…。」

「なんか、疲れてるように見えるのは気のせいかしら？ま、いいけ

どね。ん〜、いい香り。美味しそうな紅茶ね、ヴィクトリア。」

「はい、この茶葉は最近貴族の令嬢に評判なんですよ。」

「そうなんだあ。あー！！ちよつとお！！太郎ちゃんのほうが量多い！あたし、そっちがいい！！」

「なんて卑しいんだ、お前！！」

「まっ！失礼ね、レディに向かって！！」

「お前のどこがレディだっつー！！」

ふいつとそっぽを向きつつ、太郎ちゃんのカップを強奪してやった。呆然としている太郎ちゃんを尻目に一口。

ああ、確かに美味しい。評判なのもわかるかも。

「んー！美味しい！！美味しいよ、ヴィクトリア！」

「ふ…フレイア様…」

「んふつ。どうしたの、ヴィクトリア？」

カタカタと小さく震えているヴィクトリア。

あーあ。残念だわあ。

につこり、自分の中でも極上の笑顔で笑って、また一口飲んだ。

「じめんねえ、ヴィクトリア。あたし、毒じゃ死なないの。」

ざあんなん、ヴィクトリア。ご愁傷様。

05: What your name? (後書き)

北欧神話について、間違ってる場合もあるかもしれないので、間違ってたらず教えて下さいませ。

06：無駄な努力

目を見開いてあたしを見ている周囲を尻目に、カップに残っていた紅茶を一気した。

うーん、我ながらいい飲みっぷり。

それを蒼白な顔で見っていた太郎ちゃんが、慌ててあたしの持っていたカップを奪った。

「毒って、お前…体に異常はないのか…」

「ん？だから言ったじゃない。あたしは毒じゃ死なないって。ま、致死量にはちよおーっと足りないけど、普通の人間だったら意識が飛ぶわね。これじゃ。」

「マクシマス！その女を捕まえろ！！」

「はっ！！」

次郎さんが怒鳴った。

もう、怒鳴らなくなっただけいいじゃない。頭に響くんだけど。マッチョメン隊長が腕を後ろにひねり上げて拘束しているけど、そんなにしくてもヴィクトリアは逃げないと思うわよ。もとい、逃げられないのよ。

「ねえ、マッチョメン隊長さ。離してやってよ、ヴィクトリア痛そーじゃない。」

「フレイア、何言ってるかわかってるか！？ヴァルハラ国王を毒殺しようとした女だぞ！？牢にぶち込むのが筋だろ！」

「だからー、あの量じゃ死なないって。精々、数日寝込む位ね。」

「それでも、拘束の手を緩めるわけにはいきません。取り調べをして、裏にいる人物を洗い出さねば。」

次郎さんまで怖い顔であたしを見る。

はーっと溜め息を付いて、組んでいた足を下ろす。そして、紅茶が注がれていた違うカップを手にとって一口飲んだ。

「誰が許すって言ったのよ。腕を解放してやってって言ったの。どうせ、ヴィクトリアは動けないわよ。あたしが経穴突いたからね。ね、ヴィクトリア、指一本でも動かせる？」

驚いた表情のマツチヨメン隊長が、急いでヴィクトリアを解放してやった。あたしに経穴を突かれていたヴィクトリアは、解放された途端に膝から崩れ落ちる。

苦々しい目線をヴィクトリアから感じるけど、それだけじゃあ、あたしはビクともしないわよ。お嬢ちゃん。

「お…おのれ…貴様、いつから気付いて…」

「いつからって言われたら、最初からよ。」

「何だと？フレイア、最初から気付いてたと言っのか？ヴィクトリアはこの国の子爵家の娘だぞ？それが、初めて会ったお前が何故そんな事を知り得るのだ！」

うん。今から説明するから待ってね。

ヴィクトリアの近くに寄って、動けなくなっている彼女を見下ろす。ギリギリとあたしを睨んでいるヴィクトリアの表情は垂涎物だわ。

「あたしねー、元の世界で心理学の学位取ってるの。それにクアンティコにあるFBIのBAUの研修も受けてるから犯罪者の雰囲気ってわかるのよね。ヴィクトリア、あなたってあたしのプロファイル通りに行動してくれるんだもん。途中から吹き出すかと思っちゃった。」

うふつと笑ってヴィクトリアの顎をつま先で掬った。

あ、ちなみにシャワーから出た状態で、こっちに呼ばれたから裸足のままなのよね。太郎ちゃん達も気付いてくれりゃあいいのに、そう言う所は雑よねえ。

「くあんてい……？えふびーあい？一体何のことだ？」

「まあまあ。詳しく知りたいんだったら、とりあえずヴィクトリアの問題を片付けちゃいましょう。ねえ、ヴィクトリア。太郎ちゃんに毒飲ませようとしたのは何で？」

「くっ…！誰が貴様なんぞに言うか…！」

「やっぱり言わないわよねえ。だって、太郎ちゃん。どうすんの？」

「どうするもなにも。余に毒を盛ろうとしたんだぞ。処刑するのが筋だろう。」

「くっ…！」

…あー、ヤバイヤバイ。ヴィクトリア、超ピンチ…！あたし好みのナイスバディーが…このまま指加えて黙ってるわけにはいかないのよ。だいたい毒盛ったって言っても、あたしが飲んだわけだから、太郎ちゃんに害はないじゃないねえ。

皆に囲まれて、偉そうにソファーにふんぞり返っている太郎ちゃんをじーっと見つめた。

その視線に気付いた太郎ちゃんと目が合う。綺麗なエメラルドみたいな緑の眼ね。

ちなみにあたしの誕生日はダイヤモンドよ。

「ていうかさあ、太郎ちゃんだって最初から気付いてたじゃない。んー、ちよつと違うか。太郎ちゃん、ヴィクトリアが毒入れた時、気付いてたでしょ？」

あたしの発言に啞然としている太郎ちゃん。
ふーっ。そう言う反応を見せるのってまだまだ未熟者なのよね。この国、大丈夫なのかしら。

なんだか心配だわ。

06：無駄な努力（後書き）

FBIはわかると思いますが、クアンティコとBAUについての説明をちよびつと。

BAUとは、FBIの中の部署で、犯罪心理を専門としたプロファイラー軍団って言えばいいのでしょうか。

で、そのBAUの本部があるのがクアンティコ。…あれ、FBIの本部があるのがクアンティコだっけかな。

ちゃんと知りたい方はググって下さいませ。もしくはウィキ…。

07：異世界の花嫁候補はよく喋る

「ていうかさあ、太郎ちゃんだって最初から気付いてたじゃない。んー、ちよつと違うか。太郎ちゃん、ヴィクトリアが毒入れた時、気付いてたでしょ？」

フレシアと名乗った目の前の女を穴が開くほど凝視した。

「——实际死ななかったが——、ヴィクトリアの正体を最初から見破り——じゃああの身体をまさぐっていたのは身体検査か？——、おまけに経穴を突いてヴィクトリアの動きを封じた——恥ずかしい話だがいつ突いたのかまったくわからん——、フレシア。その上、余が毒を仕込まれていたのを知っていたのも気付いていたとは。」

全くこの女は、元の世界でどんな事をしていたのだろう。ため息を付いて、フレシアを元のソファーに座らせた。

「確かに気付いてはいた。だが、余は飲むつもりはなかったし、まさか、お前が飲むとは思わなかった。大体、余も毒を仕込まれていても死なぬがな。」

そう言うと、呆れた。と言うようにフレシアは眉をピクリと動かしただが、それだけだった。

「あら、一応耐性はついてるのね。まあ、王家とかって暗殺紛いの

毒殺とかつて日常茶飯事っぽいしね。でもね、知ってる？犯罪心理学から見るとね、毒殺って大抵女の犯行なのよ。」

「そうなのか？」

「そう。ほら、女って絞殺とかー、撲殺するには力がないじゃない？だから、簡単な毒を使うのよ。まあ、これはあくまでも犯罪心理だから、男が毒殺する場合だってあるけどね。」

楽しそうに話すフレシアを見て、なんだか疲れてきた。

今日の所は、これで終いにして明日に持ち超そう。そう思って、動けないヴィクトリアに視線を移す。どうやら本格的に動けないらしい。これはどうしたことかと思っていると、フレシアが妙に艶っぽい目線を余に寄越した。

………

…何やら嫌な予感がするのだが…一応ここは聞いた方が良いのか？だが、絶対聞かなかった方が良かったと思えるだけの自信はあるぞ。

「……何やら言いたい事がありそうだな、フレシア…」

「あ、気付いちゃったー？やーん、太郎ちゃんったら読心術の心得があるの？ちなみに私、読心術も読唇術も出来るんだけど、この世界の言葉でも読唇術って出来るのかしら？て言うか、言葉が通じてる時点で無問題って感じだけだねー！」

…こいつは本当によく喋る…。

余は王だ。あまねく貴族令嬢や、他国の王女達とも社交の場で会ったりすると話しかけられたりする。その時彼女達は、余を讃辞する言葉をかけ、さり気なく自分達のアピールをする。まあ、あからさまにする者もいたが。

現に、フレイア以外の花嫁候補は、楚々として上品な貴族令嬢や、フレイア程ではないが美しいと評判の隣国の王女だったりする。その彼女達は、腹の中ではどう思っているのかは知らぬが、表だって余を貶^{けな}したり、この国を貶^{けな}したりはしない。

それがだ！

会ったばかりのフレイアは、余を『たろうちゃん』とちゃん付けで呼んだばかりか、召喚長を下さい、キモい、気色悪い、剛毛、腕毛、フサフサとまで宣^{のたま}い、マキシマスを投げ飛ばした上、余に全く敬意を表さん！！！！

そうだ、全ての疲労とイライラの原因はそこだっ！！！！

「そんな事はどうでもよい、何故お前はそんな目線を余に寄越す？」

「うふっ、わかってるでしょー？ ヴィクトリアをあたしの部屋に置いていって。」

「置いていつてどうする。余に毒を盛ろうとした女だぞ。反逆者で断罪せねばなんのに、何故お前が？」

「んふー！ 朝になってからのお楽しみー！」

艶やかに笑い言って、余達を部屋から追い出したフレイア。
ドアが閉められた後、漏れ聞こえた声はあまりにも聞くに耐えない
嬌声だった…。

言われた通り、次の日の朝、フレイアの部屋をノックする。
早くせねば、朝の謁見に間に合わん。ジローリアスも懷中時計を
気にしている。

「起きているか、フレイア？」

「はあゝい…起きてるわよ…」

何とも間延びした声が聞こえたと思ったら、ドアが開いた。
開いた先にいたのは…

「おま…フレイア！！なんでお前は全裸で出て来るんだ！！」

「朝からおつきい声出さないでよ、ヒステリーねえ。それに、全裸
って言っても、シーツ巻きつけてるでしょう？」

「お前には恥じらいと言う物が無いのか！？」

「あるわよ。一応。」

しれつと言いつつ放ったフレイアを見て、側にいたジローリアスは頭に手を当てて唸っている。

マクシマスと他二人は視線をさまよわせているが、チラチラと見ているのが丸わかりだ。

「わかった。もういいから、服を着ろ…。朝から何だか疲れたな…。

」

我知らず深い深いため息を付いて、フレイアを部屋に押し込めたら、またまたフレイアは余達の想像を竜巻並みの破壊力でぶっ飛ばしてくれた。

え？何をしたって？誰だ、お前は！まあ、良い。

フレイアはだな…

「何でここでシーツを落とすんだ！！！！！！！！！！」

「え？だって服どこにあるかわかんないから、ここで着替えようと思っただけ。」

あまりの光景に、ジローリアス他三人は啞然としている。そして、我に返った彼らは急いで後ろを向いた。

…お前達…顔が真っ赤だぞ…

朝日に照らされたフレイアの身体「全裸」を見ながら、こいつは絶対に花嫁候補から外そうと思った。

…しかし、いい身体だ。

08：変貌を遂げた侍女（前書き）

第三者視点に変えました。

08：変貌を遂げた侍女

とりあえずシーツを落としてみたものの、着る物が見当たらず、フレイアはベッドに寝ているヴィクトリアの方へとすたすた歩いていく。勿論、男の視線なんて気にしてない。というか、タロヒュージ以外は全員後ろを向いているのだが。

「ヴィクトリアー、起きて〜。あたしの着る物どこにあるか知らない？」

もぞもぞとベッドの中のふくらみから、ヴィクトリアの黒髪が覗く。その瞬間、ヴィクトリアはガバツと起き上がったのだが、案の定身体には何も身に着けてはいなかった。それを見て、再びタロヒュージは頭痛が襲ってきたのか、頭に手をやり、眉間に皺を刻んだまま目を瞑ってしまった。

「おはようございます、フレイア様！すみません、私ったら寝坊してしまっ！〜」

「ん〜？いいのよ、服の場所さえ教えてくれれば寝ててもいいのよ。昨日の今日で身体が辛いでしょ？それにね、ヴィクトリアの素敵なか・ら・だ、朝からそのむっさい男共にサービスしちゃう駄目よ？」

そう言っ、自分の事は棚に上げ、フレイアは彼女の身体をシーツで隠してあげたのである。その仕草にうっとりとしているヴィクトリアだが、ふと部屋のドア付近で屯たむろしている輩を見つけた。その瞬

間、絹を裂くような悲鳴が…フレイアが計らずも口を塞いでいたので上がらなかった。

しかし、嫁入り前の裸、しかもこのヴァルハラの勇猛果敢な麗しの若き国王（逆玉？1候補）タロヒュージと、冷徹だけどその視線に刺されたいグッドルツキング！と評判な宰相ジローリアス、国王を守る筋肉ムキムキ白い歯が眩しい近衛隊長のマキシマス…とその部下。を見られたのである。悲鳴を上げられなくとも、うるうると涙目である。最早、自分が国王に毒を盛った事など都合よく忘れてしまっている。

「ほら、泣かないで。いい子ね、もし泣きたいなら、あたしのこの胸でお泣きなさい！！」

「フレイアさま…！！」

そう言つて、ヴィクトリアはフレイアに抱き付いて泣き出してしまったのである。

もちろん、フレイアはこの時も全裸。

「いい加減にしないか！！！！フレイア！お前はさつさと服を着ろ！！それに、ヴィクトリア！お前も起きて着替える！！」

抱き合っていた彼女達は怒声がした方を振り返った。赤い顔でわなわなと震えているタロヒュージを見て、フレイアはちっ！と短く舌打ち、ヴィクトリアに再度服の在り処を聞き、着替えるからと彼らを追い出した。ようやく男達が服を来たフレイアとヴィクトリアに

会えたのは、それから一刻後の事である。

「さつきは挨拶してなかったわね。おはよう、皆さん、ご機嫌麗し
ゆう。」

「…全く麗しくないがな…」

につこりと女神のように微笑んだフレイアに対して、タロヒュージ
は朝っぱらからとても疲れた顔を披露していた。それに気付いてい
たが、めんどくさいからほって置こうと即断したフレイアは早速タ
ベの事に付いて話します。

「さて、今集まってるのは他でもないわ、ヴィクトリアの事よね。
誰が太郎ちゃんに毒を入れると命令したのか。犯人の名前をヴィ
クトリアの口から言ってもらいましょうか。ヴィクトリア、おい
で〜！」

「はい、フレイア様！私に陛下へ毒を盛れと命令したのは、夏^か長官
のフェンネル侯爵でございます！」

「あら、よく言えたわね。ご褒美よ、いらっしゃい。」

「ほ、本当ですか、フレイア様…。私すごく嬉しい…」

そう言って、艶めかしい顔に朱を走らせたヴィクトリアは、ソファ
ーに座っていたフレイアの隣に座っておもむろに抱き付いた。フレ

イアもヴィクトリアの肩に手を回して、抱き締めている。その場はまるで、見る人が見たら恋人同士がいちゃついているとしか思えないほど、むんむんフェロモンが漂っている。

一方、ヴィクトリアの口から語られた内容に驚愕している面々はその光景に突っ込む事が出来ないでいた。

「まさか夏長官とは…」

「フェンネル侯爵は先王の時代からの重鎮ですよ。それが一体なぜ？理由がわからないのですが。」

「おい、ヴィクトリア！その話、本当なのであろうな！？」

甘い雰囲気を破られたヴィクトリアは、あからさまに嫌そうな顔を自国の国王に向けた。その顔を見て顔を引きつらせなかったのは、フレイアだけである。

フレイアに引っ付いたまま、ヴィクトリアはさも面倒くさいと言う風にそっけなく質問に答えた。

「ああ、そうですよ。あのくそじじいが私に『陛下を亡き者にすれば、ワシがこの国を牛耳れるのじゃー』とかつて言って、フェンネル家秘蔵の毒を私に差し出してきたんですもの。私の家は子爵家でフェンネル侯爵家、それも『夏』の長官をしているあの人には頭が上がりませんもん。だから、陛下に毒を盛ったんです。逆らえば、私の家がどうなってもいいのかー！ってね。成功した暁には、ワシの息子の嫁にしてやるって言われたんですよ。言いなりになるしかないじゃないですか。」

「大変だったわね、ヴィクトリア。」

「ああ、フレイア様！ヴィクトリア、超怖かったんですー！！だってね、あのじじいだったら、私の事をいつつもいやらしい目線で見てるんですよ？視姦されてたんですー！もうすつごく気持ち悪い！！ああ…でも、フレイア様にだったらされても…いいです…。きゃっ！私ったら恥ずかしい！！」

「んもー！可愛い事言ってくれるじゃない、ヴィクトリア」

豹変とはまさにこの事である。昨日見たあの憤ましやかなヴィクトリアと別人なのかと疑いたくなるほどの別人っぷりに、誰もが言葉を失った。

今やその彼女は、泣いてもいないのにすすんと鼻をならして、フレイアの胸に抱き付いてそれを宥めるように、頭を撫でってくれる彼女にご満悦の様子だ。傍目から見たら、単なるバカップルである。ちよつと…いや、かなり普通と違うのは、それが同性である事、それに彼女達が会ったのがまだ一日も経っていない事。それを除けば、

…完璧ヴィクトリアはツンデレだ。それもフレイアに対してだけ。

ぶりっ子…

ヴィクトリアの余りの豹変ぶりに、啞然とその光景を見ていた男共の頭の中で、その言葉がもれなく浮かんだのは偶然ではないだろう。

後に。

ヴァルハラでは、『子爵令嬢が教えるぶりっ子妙技！』これで貴女もヴィクトリア』が発売され、一大ブームを巻き起こすことになる。

09：宣言

ヴァルハラ国の国政には、『春夏秋冬』と呼ばれる庁が存在し、それぞれの部署のトップとして長官と呼ばれる人物が在籍している。それぞれの部署毎に扱える権限が異なるが故に、縦の繋がりはあっても横の繋がりは皆無と言っても良い。ただそれは仕事に限ったことであり、個人の範囲で言えばそれは吝か^{やいね}ではない。さて、春夏秋冬の庁がどのような割振りで仕事をしているのか、簡単に言ってしまう。

○春の庁：戸籍や土地の管理、運営。国民の健康に関する全般を担当。

○夏の庁：軍事関連及び、災害時に置ける復興支援全般担当。但し、災害時の復興支援の場合は春の庁が陣頭指揮を取る。

○秋の庁：法律関連全般を担当。対外交渉も兼任。

○冬の庁：武器及び、食料備蓄関連担当。有事の際の武器使用又は持ち出しは、国王、宰相兩名の承認及び長官の承認を得なければならないが、食料備蓄開放は三名の内、二名の了承を得れば良い。

この他に、王族の身の回りの世話をする『月』、国の祭祀を担当する『星』が存在しているが、この2つの庁には国政に携わる程の権限は無く、あくまでも裏方としての庁として存在している。ちなみに、フレイアを召喚した部署は『星』に所管されている。

更に言えば、国の予算や収入に関する庁もあっても良さそうなものだが、その部分は国王と宰相が扱っているため、予算編成の時期には国王と宰相両名の度重なる厳重な審査を通過した上承認が下りるという、極めて厳しいものとなっている。

「なる程ね。じゃあそのフェンネル侯爵って言う人は、軍事関連の長官なのね」

真面目な顔で（ヴィクトリアをべったり張り付かせたまま）そう言ったフレイアを見て、一瞬顔をしかめた上でジローリアスが頷く。

「左様です。軍を司る夏を統括するからこそ短慮な行動は慎んで貰いたかったんですが、アレ（・・・）にそれを耐えるだけの忍耐と矜持が無かったのでしょうか。全くもって遺憾ですね。」

サラリとフェンネル侯爵をアレ呼ばわりしたジローリアスをチラリと見たフレイアは、口元に誰にも見られず微笑を浮かべる。

次郎さんって、なかなか面白い。

ふふっ、腹黒系かー。裏でコソコソ小細工しそうなタイプではないけど、敵に回したら案外厄介そう。宰相やってるだけあって、頭の回転も早そうだしね。ていうか、粘着質っぽい。うわぁ、ご飯粒タイプ。

それに、綺麗な顔してるから顔で釣った女から情報を取れるだけ取ったらポイ捨てる類の男だね、こいつは。

等と、結構……いや相当失礼な事を考えていた。

「だけど、そのフェンネル侯爵って言う人だけの計画じゃないと思うんだけど。仮に、太郎ちゃんが毒を飲んでたとしても、あの量じゃ死なないもの。ねえヴィクトリア、そのジジイに渡された量を太郎ちゃんのカップに全部入れた？」

「はい、入れました。渡された小瓶にも極少量しか入ってなかったんで、これで効くのかしらと思いましたから」

ふーん。と唸りながらヴィクトリアの髪を撫でているフレイアを、タロヒュージは訝しげに目を細めた。それに目ざとく気づいたフレイアは、ヴィクトリアに朝食を用意してくれと頼み、その場から彼女を退出させた。

再び静かになった部屋で、フレイアは足を組んで、タロヒュージに向かってニヤリと笑んだ。

「で？何か言いたい事がありそうね」

「朝から素っ裸を惜しげもなく披露したお前の事だ。また突拍子の無い事を言い出すんじゃないかと思ってな」

「ああ、あれね。別に何て事はないわ。ねえ、隊長？」

「なんだ？」

呼ばれたマキシマスは何事だと思い、フレイアの方に視線を移した。

「あなたチェリー君？」

「…は？」

「だから童貞なのかって聞いているんだけど」

その問いかけにマキシマスだけではなく、その場にいた男達の空気が凍った。

まさかここにいる全員が童貞じゃないわよねと思い始めているフレイアは憐憫を込めて祈った。

残念なイケメン達に幸多かれ。

きつとすぐに引く手数多で寄ってくるはず。

あら、でも王様業の太郎ちゃんもチェリー君？

固まったままのタロヒュージに手を振って正気へと引き戻そうとした瞬間、マキシマスが爆発した。

「違うに決まってるんだろ！！俺もう29だぞ！この年で女知らないなんて有り得ん！」

憤慨だとはかりに怒鳴ったマキシマスの怒気で正気に戻ったタロヒュージ、ジローリアス他2名もうんうんと頷いている。

「俺はともかく、ジローリ…いや、閣下の女に対する卑劣ぶりは有名だぞ！」

「へー。例えば？」

「ジローリ…閣下は情報を持った女を厳選して選んだ上で、自分に得になるような女としか寝ないからな！そして、引き出し終わったらポイだ！どうだ、卑劣だろう！！」

「マキシマス！！お前と言う奴はよくもまあ人の事をペラペラペラと…っ！」

「事実だろーが！引き出し終わった女を牢に入れたり、城から追いつ出してるのは俺なんだぞ！いつもいつもお前に対する怨み事を聞かされる俺の身にもなって見る！」

「誰がお前みたいな頭ん中が筋肉で出来たような単細胞になりたいと思うんですか。そんな酔狂な人がいたら見てみたいものですね、マキシマス。」

「なんだと、こらあ！」

頭から湯気が上るのではないかと思う程、顔を真っ赤にして怒鳴っているマキシマスと、さも上から目線のジローリアスをフレイアはじーっと見ていた。

なんだ、次郎さんの性癖はやっぱりそうだったか。と思いつつ。

「あいつらは放って置いて、何故いきなりそんな話になるんだ？ ああ、お前の頭がおかしいからとかそんな残念な事が理由なら、余は朝議と謁見があるからもう行くぞ」

「太郎ちゃんがあたしの裸を見て、微動だにしなかった事は褒めてあげる」

につこりと笑って足を組み替えたフレイアに眉を顰めたタロヒュージは、未だ騒がしい宰相と近衛隊長を黙らせ、フレイアに今の言葉の先を促した。

「戦場で一番危険なのは、裸に興味を持った奴じゃない。『持たない』奴よ。興味を持った男はどうしても隙が出来るわ。そこを狙われたら戦場では命取り。同様に、隊長みたいにあたしの裸を見て後ろを向いたのも、あたしから言わせたら、愚の骨頂としか言いようがないわね」

嘲笑うかのように話すフレイアの言葉に内心動揺を隠せないマキシマスは、背中に冷や汗をかいているのを自覚していたが、そこは腐っても近衛隊長である。間違っても顔には出さない。しかし、フレイアは鋭くそこを付く。

「隊長、動揺してるようだけど事実よ？ 経験がない初なチェリー君じゃないんだから、女の裸なんて見慣れてるんでしょう？ それが例え、王様の花嫁候補であろうともね。あなたは、タロヒュージ陛下

を守る為にそこにいるの。その事を忘れて、たかが裸一つで狼狽えるなんて本当にみつともない」

「……………」

「このヴァルハラって国は馬鹿に平和なのかと思ったら、王様が毒殺されようとしてる。なかなか面白そうじゃない？ だけど、警護をしているのが女の裸程度で狼狽するような近衛隊長じゃ、先が思いやられる。本当にね」

茫然とする周囲をフレイアが蔑んだ目で一瞥していると、ヴィクトリアが軽やかな足取りで、朝食の乗ったワゴンを運んで部屋に入ってきた。

静寂が支配する部屋に、カチャカチャと皿が並べられる音と、ヴィクトリアの場違いな鼻歌が響く。

口を開いたのは、タロヒュージ。楽しそうに口を歪めて。

「お前はなかなか面白い考え方の女だ。花嫁候補から外すのが惜しいな」

「このあたしを嫁にするなんて、太郎ちゃん。あなたにはまだまだあたしは不釣り合いよ」

思わず左右色の違う瞳に魅入った。それだけフレイアの持つ絶対的な自信に魅了された。その自信は全く根拠の無い驕りなのか、はたまた、裏打ちされた何かがフレイアにはあるのか。

タロヒュージは迷うことなく、後者を選んだ。ヴァルハラ王とし

ての直感ではあるが、間違えることなど無いかのような直感だった。フレイアの纏うオーラは、さながら神のオーラと言っても良い。流石は、美と慈愛を愛しながら、破壊をも司る女神フレイヤの名を付けようとしただけはある。

まさに美しい物には棘があると言われるように、ただ単に美しいだけではない。

この女

手放すには惜しすぎる。

「…ふっ…そうか…ではフレイア、お前を候補から外さない。せいぜい、お前のお眼鏡に叶う男となって、余に惚れ倒させてから候補から外してやる」

くつくつと笑っているタロヒュージの顔を見て、妖艶な笑みを浮かべたフレイアはそれは楽しみだとばかりに口に言葉を乗せ、紡ぎ出す。

「楽しみにしてるわ、太郎ちゃん」

09：宣言（後書き）

今回はちょっとマズメに。

10：確認条項（前書き）

今回は短めです。

10：確認条項

フレイアの部屋を出て、謁見室へと歩いていく最中、ジローリアスが口を開いた。

「よろしいのですか？」

ジローリアスは何がとは言わない。

後ろに護衛として付き従うマキシマスも何をとは問わない。
ただ自分達が仕える主の言葉を待つ。

「面白そうだからな。」

端正な顔に、くつと口端だけ歪めた顔を久しぶりに見た面々は、これから起こるであろう事に僅かばかり身構えた。

そもそも初めから正妃は決まっている様なもので、他の候補はあくまでも余興的な意味合いが強い。特に、異世界から召喚されたフレイアは余計にそれが濃い。

このまま正妃が『かの方』に決まれば、フレイアが召喚された甲斐はなく、彼女はそのまま後宮に留め置かれるか、他の高官に下げ渡される。

…はずだ。

だが、彼女は自ずと察してか自ら花嫁候補から外れたいと申し出て、陛下御自ら引き留められた。

これが意味するのは一体。

とかく、これから騒がしくなりそうだとジローリアスが密かに眉を顰めた所で、謁見室への扉が開いた。

10：確認条項（後書き）

少しブラック色強めで。

11：敵情視察

朝食を美味しくペロリと平らげたフレイアは、食後の紅茶を飲みながら物思いに捕らわれていた。

緩やかな朝日を浴びながらお茶を飲むフレイアは、まるで絵画から抜け出たように美しい。朝食の皿を片づけているヴィクトリアは、思わず手を止めてうつとりと見入ってしまった。

なんてお美しいんでしょう、フレイア様…。

あの細くて長い指が…唇が…舌が…ああ、フレイア様…！。

ほう…と頬を染めながら、感嘆と色欲混じりの溜め息をついたヴィクトリアだが、フレイアは全く色気の無いことを考えていた。

ああ、コーヒーが飲みたいなあ…

と。

元来フレイアはコーヒー派である。ちなみに一番好きな豆はブルーマウンテンなのだが、キリマンジャロの深煎りも好きだ。アメリカンなんて薄すぎて飲んだ気がしない。

ダーズリンやアッサム等の紅茶も嫌いではないのだが、やはり好みは好みだ。

コーヒーが飲みたいと思っていると、ヴィクトリアが声をかけてきた。

「フレイア様？如何なさいました？」

「え？いや、別に大した事じゃないわ。気にしないで？」

「そうでございますか？…何かご入り用でしたら何なりと申しつけ下さい。私、フレイア様のためだったら…」

もじもじと恥じらうヴィクトリアを見て、うふ。と笑ったフレイアはヴィクトリアの手を取り、同じソファに座らせて腰を抱く。手のひらで軽く頬を撫でて、耳元で囁いた。

「ありがとう、ヴィクトリア。あたしは幸せ者ね。」

そしてそのまま耳元にちゅっ と軽くキスをしてヴィクトリアを見ると、顔を真っ赤にしている。目なんかうるうるだ。

ああもう可愛いわあ… と思って顔をずらして、ヴィクトリアの唇に自らを重ようとし……

「お待ちなさい！……！」

部屋になんとか甲高い声が響いたが、それに構わずヴィクトリアの唇に食らいつこうとしたのだが、何やら誰かに阻まれた。

むっとして阻んだ人物を見ると、赤も赤。湯気でも上がりそうな位顔を真っ赤にした女の子がいた。

ブルネットのクルクル巻き毛で、ぱっちり焦茶のお目めが愛らしい。綺麗と言うよりは可愛い類の女の子だ。

フレイアの胸ほどまでしかない身長だが、身なりはいい。着ているドレスも高そうだ。

どうにもいいとこの貴族辺りの子供っぽい感じがする。

そんな子がどうしてこんな所に？と疑問はいろいろあるのだが、ひとまずこの子は、誰なんだろうと内心首を傾げながらも、しっかりとヴィクトリアの腰を抱いたまま、突然の乱入者に誰なのか聞いた。

「どちら様？」

「それよりも、その侍女をお放しなさい！！なんて破廉恥なっ！！」

「ハレンチだつてー、心外ねえヴィクトリア。ところで、ヴィクトリア、この子誰なの？」

ブルブル震えてる女の子が自己紹介してくれないので、面倒くさくなってヴィクトリアに訪ねた。ヴィクトリアは、突然の乱入者をチラッと見た後、フレイアに抱きついて、上目遣いで答えた。

「陛下の花嫁候補の一人であります、イザベル様ですわ。」

「えっ！！太郎ちゃんって幼女趣味なの！？」

「なっ…！！幼女とは何ですか、失礼なっ！！わたくし、これでも17ですわっ！！」

「…随分幼く見えるけど。あ、あたしフレイアって言っの。よろしくね？」

一応挨拶はしたのだが、キーツと声が聞こえそうな位イザベルは憤っている。

幼女ではないと言ったイザベルを上から下までマジマジと見たが、年齢詐称ではないかと思ってしまう。

それ位、イザベルは幼い印象が拭えないのだ。

「フレイア、貴女、本っ当に失礼ですわっっ！！じゃあ貴女幾つなの！？」

「ふふっ…いくつに見える？」

不意にフレイアから艶めかしい流し目で見られたイザベルは、違う意味で真っ赤になった。

な…何なのでしょう、この感じ…。まだ朝だと言っのにお色気が凄いですわ！！

あの左右の違う瞳、繊細な鼻筋、艶やかに赤い唇…気だるそうな雰囲気…

どうしてかしら、あの左右色の違う瞳に見つめられると、変な気持ちになってしまうような…

ああ、半開きの唇に人差し指を…

「どうかした？」

くすくすと笑っているフレイアを見て、はっと我に戻り、そして次の瞬間真っ赤になったイザベルは、そのまま部屋を走って出て行ってしまった。

再びヴィクトリアと二人になってしまったフレイアは、ヴィクトリアの髪を撫でながら「一体何しに来たのかしらねえ」と面白そうに呟いた。

ヴィクトリアは、きっと花嫁候補の敵情視察に来たのねと思いながら、フレイアが自分の髪を撫でる指に、うっとりと感じ入ったのである。

その頃イザベルはと言つと…

「いやあああつつ！……！……わたくし、女性に興味はないわあああ
あー！……！……！……！」

悶絶しながら、大絶叫していた。

それを見たイザベル付きの侍女達が慌てふためいたのは言うまでもない。

「イザベル様！？如何なさいました！？」

「イザベル様にご乱心でございますわ！……！」

「イザベル様にご乱心と報告がありましたか……」

「何？一体何があった。」

「どうやらフレイア様の色気に当てられた様で……。『わたくしは女性には興味ないわ』と叫んでいらっしゃったようです。」

「フレイアか……。」

がっくりうなだれたタロヒュージとジローリアスであった。

11：敵情視察（後書き）

フェロモン製造機フレイア様。

12：マツコ・フレイア・デラックス

昼食もしっかりと取って、すっかり暇になったフレイアは、とりあえずこの世界の事と花嫁候補の事について知っておかないといけな
いだろうと思っただ。

なんたつて、国の名前や王様の名前はわかるのだが、タロヒュージ
の年はおろか育った環境等々知らないから。

とりあえず花嫁云々にはなる気なんぞさらさら無いが、敵を知るに
は味方からである。

こちらでは逆に異世界になってしまった故郷では、十分すぎるほど
敵の内情を知り尽くすのに力は惜しまなかったフレイアではあるが、
その時には優秀な部下達がいたし、こちらと違い、完全コンピュー
ター化しているのだ。ハッキングはおろか、そのまま情報の改竄^{かいざん}
だつてやっていた情報化社会からいきなり許可もなくトリップ。ここ
までアナログな世界、しかも下拵^{したし}えを完璧にこなす部下もいないと
なると、やはり自分自ら動かねば情報は得られない。

面倒だなーと思いつながら、どこかわくわくしている自分。そう、
近年稀にみる期待感。

あちらの世界では、こんなわくわく感なんてとうの昔に感じなくな
つて久しい。実験が成功し、治験も通り、製品が発売され、更に賞
まで穫ったが、それでも何の感慨もわかなかった。

実のところ、フレイアは真っ黒も真っ黒。宇宙の神秘、ビッグバン
で出来るブラックホール並みに光を通さない位に、腹も頭脳も真っ
黒なのだ。

本来のフレイアであれば、『アポなし』と『未許可』で強引にこちらへと連れてこられたらという暴挙は、はつきり言っておそこにいた全員を殺しても差し支えないくらいに苛立たせた。だが、持ち前のファイティングスピリッツと、退屈からの脱却、そして何よりも異世界トリップと言う、ファンタジー極まりない現象に、些かの興味を持ったからに過ぎない。

太郎ちゃんを殺して女王になるのもいいかも　うふふふ…とあちらの世界で彼女を知っている人達だったら、身の毛のよだつような笑い声が部屋に響いた。

それを見て、ヴィクトリアが身悶えていたのはご愛嬌である。

ヴィクトリアが教えてくれるのを聞くのも良いが、とりあえずこの国を知ることが最優先だ。そう思い、図書室みたいなのがないかと聞くと、蔵書室がありますよ。との事なので、その蔵書室なるものへと案内してもらった。

別に護衛なんて必要ないので断ろうと思ったが、そうもいかないらしく、まだまだ新米っぽい近衛が後ろをちょこちょこ付いてきた。

仮にも花嫁候補だっというのに、新米を付けると言う辺りに、自分に対するタロヒュージの扱いが透けて見える。確か先ほどのイザベルは、後ろに二、三人付き従っていたようだったが、それはタロヒュージが付けたものではないのだろう。服装が違っていたし。

となると、この異世界トリップをしちゃった自分は、後見がないわけだ。

そうになると、いくら花嫁、王妃になろうとしても駄目なわけだ。

だったらさっさと、候補から外してもらいたいものだが、あの金髪太郎は何を考えてだか外さないと来たもんだ。まあ、面白そうだからと言う理由だろう。BAU直伝のプロファイリングを舐めるなよ。

と毒づいていると『蔵書室』と書かれたプレートがキラキラと光るドアの前に付いていた。やはり識字も出来るようだ。あっぱれ、異世界トリップ。

両開きのドアだったが、別に無理して両開きにする必要はない。なので、片方のドアを開くと、図書室特有の紙の匂いとインクの匂いが鼻をくすぐった。

くどいようだが、情報化社会出身のフレリア。普段はエコだと言うので、紙資源は徹底的に省いている。書類仕事が無いわけではないが、殆どがパソコンの画面上で済むため、この匂いからは遠ざかっていたのも事実だ。

思わず頬が弛むと、司書と思しき若い男がイスから立ち上がり、フレリアの方へと歩み寄ってきた。心なしが顔が赤いが、まあそんなの関係ねーである。古いが。

「あの…どちら様でいらっしゃいますでしょうか？」

「星の花嫁候補でいらっしゃるフレリア様です。フレリア様が本をお読みにになりたいと仰いまして。司書殿、構いませんか？」

「星の…。なる程、わかりました。では此方へどうぞ。」

と言う、新米護衛と司書の会話が成され、司書の案内で通されたテーブルの前にあるイスに腰掛けて、この『蔵書室』なるものの説明を受けた。

——この『蔵書室』には、一万点を超える蔵書がございます。近隣国では隣に並び立つ国がないと言うほどの、素晴らしい程の蔵書数！古代歴史書から経済書籍、壮大なスケールで描かれた絵画史や宗教画史、また、女の子でしたら誰しもが憧れる童話や、男の子でしたらヒーロー物なんていうのもございますよ！しかも、それら全て初版本でございます！！マニアであれば垂涎物の一冊が、この蔵書室には沢山あるのです！！あ、勿論、貴族社会をすっぱ抜いたゴシップ誌や、噂話で構築された週刊誌、お色気たっぷり本なんかもございますので、もしご興味がおありでしたらば私めに一言かけて下さいませ——

一気にまくし立てた司書に若干引きながら、説明をありがとうと微笑みかけた。

顔を赤らめた司書と新米護衛（以降ポチ）を尻目に、さーて何を讀もうかなと考えて、とりあえず歴史書だなと思い、『ヴァルハラ建国記』なるもの（二十章からなる全四十冊の超大作。タロヒュージやジローリアスもトライしたが、難解な言葉選びに苦戦して両者挫折。ちなみに一冊当たりのページ数は広辞苑並み。）を本棚からこそと抜いて、テーブルにドンつと置いて読み始めた。

「…なんとつ…いきなり建国記から読み始めるとは…」

「…僕あれ一ページで挫折しましたよ。」

「ここだけの話、あの建国記をしたためた作者の一族は、あの建国記のせいで崩壊したと言います。来る日も来る日も建国記、遺言も『建国記を頼む』だったらいいですからねえ…」

「…すみません、司書殿。僕は今何を見ているんでしょうか。どうも、フレイア様は雑誌でも見るかの如くパラパラと捲っているようにしか見えないのですが…」

「私もですね。やはり建国記は難解なんで…」

そう二人が話している最中、ボタンと一冊が閉じられ、すぐさま二冊目に突入したフレイア。その読むスピードは、やはり雑誌をパラパラと立ち読みしているかの如く早い。

本当に読んでるの？

わかんないよ、パラパラ読んでるフリじゃね？

そんな司書とポチとの無言の会話がなされる中、黙々と本をめくり続けるフレイアの手は止まることがない。

遂には、最後の一冊を残すばかりとなったのだが、最初の第一巻を手にとってからまだ二時間も経っていなかった。

「陛下、蔵書室の司書から報告が。」

「何だ。」

「フレイア様が『ヴァルハラ建国記』を読破したと…。しかも、たった二時間で…。」

「あれをか!?!」

「司書からフレイア様のご感想も報告されています。『第五巻五章、四十一節目の表現が素晴らしく美しい。こんな言葉の扱い方をされたら、言葉が喜ぶわ。それなのに、第十三巻、十一章の七節目から三十五節までの文章表現が乏しい。それと、第十六巻十五章、二十三節から最後まで、あれじゃあ何を表現したいのか読者に伝わらない。一族で書いたんだろうけど、十巻以降の作者は屑ね。以前の作者の足下にも及ばないわ。同じ建国記扱いにするのは、以前の作者に対する冒瀆だわ』だそうです。」

「……………」

「…まだありますが聞きますか?」

「作者一族も救われんな…。しかし、ジローリアス、お前は建国記全部読んだか？」

「あんな化け物、十巻までで限界でしたよ。陛下も似たようなものでしょう？」

「余は十五巻で挫折だ。何が言いたいのかさっぱりわからない本だったな…」

はー…と今日一日で何度ついたかわからぬため息の回数を、また一つ増やしてしまった太郎と次郎だった。

「これ、つまんなーい！」

「ふ…フレイア様！こちらの本は陛下が執筆なさった…」

「文才無いんじゃないの？」

蔵書室では現在進行形で、そんな会話が成されているのだが、二人には知る由も無いことである。

12：マツコ・フレイア・デラックス（後書き）

タイトルに関しては、何も言うまい……。マツコは好きです、はい。

フレイアに関してですが、少しだけブラックフレイアが垣間見れたと思いますが、トリップする前のフレイアは相当黒いです。なので、フレイアに対してあまり素敵な希望を持たない方がいいと思います。追々その辺は書くのですけれど、その場合は前書きに注意書きを入れます。

13：快樂超特急（前書き）

一応、R115に。

13：快樂超特急

そろそろお時間ですよ、と言われるまで蔵書室にある本を読みまくったフレイアは、暇つぶしにもなったし、この国の成り立ちとかも少しだけわかった事に満足して、司書にお礼を言っ、ポチを伴い部屋に戻った。

部屋に戻ると、ヴィクトリアがお茶を用意して待っていた。それに微笑みかけ、ありがたくお茶を一口飲むと、ヴィクトリアを手招きして自分の隣へと座らせた。

「ねえ、ヴィクトリア。あたし少し疲れちゃった。膝貸して？」

「はい！どうぞー！」

ヴィクトリアはうつとりとフレイアを見て了承の返事を返すと、ありがとうと感謝の印に頬に軽くキスをされた。

心の中では悲鳴をあげ、はしやぎまくっているが、動くとなフレイアの邪魔になると思い顔を真っ赤にさせつつも、フレイアが頭を起きやすいようにスカートを直すと、そのままフレイアが頭を膝に置いて、その左右の色の違う瞳を閉じた。

——なんて綺麗なお肌かしら。キメが細かくて、透き通っていて、シミ一つない完璧さ！ 瞋もこんなに長くていらっしやる——

ヴィクトリアがうつとりと観察していると、フレイアが目を開けた。

心なしか熱を帯びている、その瞳にぞくりとしつつ、ヴィクトリアはフレリアに静かに声をかけた。

「フレリア様、如何しました？」

「ヴィクトリア…イイコトでしょうか。」

膝の上に仰向けになったフレリアに、下から見上げられたヴィクトリアに太刀打ちする術はなく、伸びてきた両手に優しく頬を包まれて、下に引つ張られた。あと少しでお互いの唇が触れ合う、まさにその瞬間、バターン！！！！と大きな音を立てて、入り口が開いた。

「ななななな何をなさっているのですか！！！！！！！！」

「…イジー。ノックくらいしなさいな、レディたるもの、礼儀つていつもの位弁えなさいよね。」

フレリアはむっつりと起き上がり、イザベルが仁王立ちしているドアへと歩く。ソファーに座っていたヴィクトリアは、少し余韻に浸ったものの、結局は二度もお預けを食らわせたイザベルを、ウザイとばかりに睨みつけた。

その侍女らしからぬ視線に一瞬怯んだものの、きつと目の前にいるフレリアに人差し指を突き付けた。

「貴女に礼儀とか言われたくありませんわっ！…じ…侍女に…てっ

…手をおお出しになるなんて…っ！恥を知らないさい！！」

決まった！！

イザベルが真っ赤になり、どもりつつもそうキメた瞬間、フレイアが思いもよらない行動に出た。

目の前に突きつけられていた人差し指を、パクリと口に含んだのである。

フレイアは175cmの女性としては高い身長を持ち主だが、イザベルはそれより10cm以上低い身長で、155cm程度しかない。その為、イザベルはフレイアを見上げねばならないのだが、突き付けた指は丁度フレイアの口元に近かった。

フレイアの口に指が含まれた瞬間、頭の中が真っ白になったイザベルは、次いで真っ赤になって指を引き抜こうとしたのだが、フレイアが彼女の腰を引き寄せて密着する形になってしまい、ますます指が引き抜けない。

そんな状況を明らかに楽しんでいる様子のフレイアは、わざと音を立ててイザベルの指をなぶる。

「…やっ……」

「イジー、あたしを見て？」

そう囁いたフレイアの左右違う瞳に見つめられながら指をなぶられ

るイザベルは、柔らかいフレイアの舌を感じながら、どんどん身体が熱くなっていく自分に戸惑いつつも、湧き上がってくる疼きに目を潤ませた。

そして、遂に腰が抜けたイザベルが床に落ちる寸前に、フレイアが腰を掴んでそれを防いだ。

「ねえ、イジー。あたしとイイコトしましょうか？」

耳元でそう呟かれ、耳を軽く噛まれたイザベルには、頷く意外になす術が無かった。

頷いたイザベルを見て、満足そうに笑ったフレイアは、徐にイザベルが着ている服のボタンを外そうとしていると――

「まてまてまてーい!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

突如乱入してきたジローリアスによって、イザベルはフレイアから引っ剥がされ、その後イザベル付きの侍女に連れられてフレイアの部屋を出て行った。

名残惜しそうに部屋を出る間際、チラッとフレイアを見ると、青い方の目を瞋り投げキスまでされたイザベルは、更に顔を赤くさせて俯いて退出した。

「で、次郎さんはなんでここに？」

「貴女付きの護衛が走って私に報告してきたんですよ。凄い形相ですね。全く…貴女は一体何をしているんですか！！」

「何って…女の子ハーレム？」

「…女の子ハー…いえ、何でもありません。聞くのは止めておきます。嫌な予感がするので。」

頭を抱えたジローリアスを見ながら、二回も邪魔されてしまったモヤモヤをどうしたものかと考えながら、隣に座ったヴィクトリアの身体を撫で回していると、またジローリアスに非難がましい目で睨まれた。

「貴女は…その性癖を何とか出来ないんですか！！」

「出来ないわね。」

きつぱりと言い切ったフレイアに、クラツと目眩がしたジローリアスは、深い深いため息を付いた。

「次郎さんって女の子好きよね？」

「は？」

「ただの質問よ、他意はないわ。次郎さん、女の子好き？」

「…嫌いな男はいないでしょう…」

「でっしょー！？女の子って、身体柔らかいし、ふわふわしてるし、いい匂いするし、可愛いしー！それを男だけが独占するなんて、冗談じゃないわって思わない？だってね、次郎さん。次郎さんが鬼畜だって言われても別に驚かないけど、そこには必ずしも嫌な快樂って言うものはないでしょ？キモチイイからしてるんでしょ？だってら、あたしが怒られるのって筋違いだと思うの。男の快樂と女の快樂は違うって言うけど、やっぱり女の子の身体はいいと思わない？特に感度のいい子だったら最っ高！どこ攻めてもいい声で鳴いてくれるじゃない？もー、あれ聞くだけで、いっぱい興奮しちゃうわよね！？あ、あたしはバイセクシャルだから、別に男もいけるのよ？だけどねー、男の喘いでる声聞くとねー…」

と、延々快樂の話を聞かされたジローリアスがフレイアからようやく解放されたのは、それから二時間後の事だった。

「……………ただいま戻りました……………」

「ど…どうした…。影が薄くなっているぞ…」

「…いや…何でも…。すみません、陛下、男って何でしょう…」

「は？」

「私はフレイア様と話していて、自分の男としての存在意義がわからなくなりました。」

「じ…ジローリアス…？」

「はー………」

その後、しばらく続いたジローリアスのため息の為に、タロヒュー
ジの仕事が捗^{はかど}らなかったのは言うまでもない。

13：快樂超特急（後書き）

…ムーンライトの方がいいのか？とか思い始めてきました。フレイア。

私の思惑をどんどん外れていく、素敵なキャラクターに…（笑）

14：太郎、うなだれる

「何だ、これは」

フレイアが来てから早いもので一週間。様々な悲鳴交じりの上奏があったものの、仕事が多くてほったらかしになっていたフレイアの部屋を訪れたタロヒュージは、開口一番そう言った。

「はあい、太郎ちゃん、ご機嫌よう。元気だったー？」

満面の笑みで迎えたフレイアは、見惚れるほど美しかったのだが。

「あら、陛下。ごきげんよう」

「お久しぶりでございます、陛下」

「お元気でした？」

「わたくし達は皆、とても元気でしたわ」

ねーと頷きあう花嫁候補が勢ぞろいしている。しかも、全員フレイアに侍^{はべ}っている。イザベルがフレイアの毒気に当てられて、その注意をしに行ったジローリアスも暫く再起不能に陥った。その事を知

つてはいたのだが、やはり忙しさにかまけて放置していたら、この惨状になっていた。報告を受けたイザベルの他、オフィーリア・ライト嬢とサマンサ・オッペンハイマー嬢、それにイヴ・ケンブリッジ姫まで増えている。

まいった。

全員タロヒュージの花嫁候補であるのに、全く気にかける素振りがない。それどころか、明らかにタロヒュージを邪険にしている。気の強いイヴが舌打ちをしたのが聞こえていたが、それがまさか自分に向けてされたものではないと信じたい。

一体全体何がどうしてこうなったのか、理由がわからない。当のフレイア本人は彼女達の身体を弄り、弄られ。ここが見覚えのある部屋でなければ、一種のいかがわしい店かと錯覚しそうになる。

誰かまともな人間はいないのか。そして一から全部説明してくれるような人間は……ぐるりと部屋を見回しても、タロヒュージには求めている人物が人っ子一人いない事に気が付いて、がっくりと肩を落とした。

仕方がないので、当事者であるフレイアと二人で話を聞こうとしたのだが、イザベル以下全員の凄まじいまでの拒否にあい、あえなく全員を同席させる事になってしまった。もうこうなれば破れかぶれである。開き直ったタロヒュージは、花嫁候補の一人であるオフィーリアからまず話を聞くことにした。

「わたくし、イザベル嬢と部屋が近い分、随分と侍女が騒いでいらつしやったのが聞こえてきたので様子を見に行ってみると、彼女たちがお顔が真っ赤で始終ポーツとしていらつしやったんです。どうしたのと侍女に聞いてみると、どうやら異世界から来た花嫁候補の

方の色気に当てられたと。わたくし、それで気になって次の日、フレイア様のお部屋に伺ったんです。最初は少しお説教をしてやろうと思ったのですが……」

そこまで言うと、オフィーリアは顔をポツと赤らめた。上目遣いに見ているのはフレイアだ。嫌な予感がしてフレイアを見ると、全く悪びれる事無くお茶を飲んでいる。

オフィーリアは春の花嫁候補だ。その春の代表らしく、麗らかな風貌を持つ可憐な美人だ。そんな彼女は驚くほど世間ずれしていない。しばらくお茶を飲み交わす内に、呆気なくフレイアは彼女の恋心を得てしまったらしい。

「あたし何もしてないわよ？こう……オフィーリアは純愛ポジションだからね」

「まあ、フレイア、何て嬉しいんでしょう。わたくしもフレイアを愛しています」

「ちょっとお！お姉さまはわたくしのものですわ！」

「まあ、イザベル。あなたのようなチビでオコチャマなお嬢ちゃんにフレイアに釣り合うと思っ……ていて？おほほほ、勝敗は目に見えているけれど、こてんぱんにやっつけてあげるわ」

「「私たちをお忘れなく」」

話を聞いていなかったサマンサとイヴも、そのフレイア争奪戦に参加しているらしい。聞くと、最初にサマンサがイザベルだけでなく、オフィーリアまで陥落されたフレイアに興味を持ったようだ。

サマンサは秋の花嫁候補だ。秋の実りに相応しく、たわやかな肉体を誇った艶美な美女だ。そんな彼女を一目で気に入ってしまったフレイアは、あつという間に肉体的コラボレーションをしてしまったらしい。今やそこに男女の境はないようである。

「本当にフレイア様は私の知らない世界へと導いてくれました。毎日が驚きの連続なんですのよ」

「サムの胸ってマジで大きいし、柔らかいの！！この胸に顔をうずめていたいと思うのは悪い事じゃないはずよね。だいたい、その筋肉バカもサムの胸ばーっか見てるし」

急に話題を振られたマキシマスは多いに狼狽え、あわててサマンサの豊かな胸から視線を引き剥がした。そんな彼を蔑んだ目で見ていたサマンサが、あからさまに気持ち悪いと暴言を吐いたのにタロヒュージはまた驚いた。

元々サマンサは礼儀正しく、人の事を悪く言う事などなかったはずなのだが、フレイアと身も心も親密になると同時にその礼儀正しさはどこかに行ってしまったらしい。なんて事だと嘆息しつつ、最後にイヴの話を聞くことになった。

最後の砦であるはずのイヴは、隣国の姫で、夏の花嫁候補だ。夏の厳しい日差しの様にハツラツとした姫なのだが、はつきり言って気

性が荒い。気が強いのだ。

そんな彼女がどうにもこうにも、フレイアに陥落されたのが信じられずに、イヴを見るとあっさりとそれを認めた。

「私、最初は全員が女に惹かれたなんて気が触れたとしか思えなかったから、フレイアに会って文句を言おうと思って、フレイアに会いに行ったの。そしたら、生憎蔵書室にいるってその不遜な侍女に言われてね」

不遜な侍女と言われたヴィクトリアは、全く気にする事無く、熱い視線をフレイアに送っている。そんな目線を送りながらも、給仕をこなしているヴィクトリアに内心呆れつつ、イヴの話に神経を戻した。

「私が蔵書室へ行った時、ちょうど私の国の本を読んでいたから、いろいろと教えてあげたの。ヴァルハラになくて私の国にあることとか、逆の事とか。まあ、驚く程吸収が早かったわ。おまけに私が知らない事まで知ってるんだもの。腹が立ったったらないわ」

「全部本に書いてあったの。それを知らないなんて、国に住んでいる者としてもつたいないと思わない？ ねえ、太郎ちゃん。あ、太郎ちゃんの書いた本っていうやつ…ごめんね、全っ然つまんなかった」

てへ　　と笑うフレイアを余計なお世話だとギリギリと睨みながら、イヴの話を聞く。どうやら負けん気の強いイヴはその事が相当悔しかったようで、フレイアを見返そうと思い、自ら必死に勉強したら

しい。しかし、それでも一日に蔵書室にある本を物凄い勢いで読破していくフレイアには勝てなかった。遂にイヴはフレイアに白旗を上げたらしい。

気の強いイヴは負けを認めると言うことは屈辱的でしかなかったが、その事をフレイアが笑う事はなかった。むしろ、潔く負けを認める事はなかなか出来る物ではないとイヴを認めてくれたのだ。そして、そのまま部屋に連れて行かれて――

「ちょっと待て、どうしてそうなる」

「私、貧乳で悩んでただけど、フレイアが貧乳には貧乳の良さがあるって言ってくれて、逆に自信が付いたの。確かに、フレイアの胸の感触を直に感じ「もういい……」

「イヴはツンデレよねー。ツンの時は本当につれないくせに、デレになったらとん甘えてくるんだから。そこが可愛いんだけどね」

「う……うるさい！！恥ずかしい事を言うな！！」

「……いちゃつくなら、よそでやってくれないか」

がつくりとうなだれたタロヒュージを氣遣ってマキシマスが肩を叩いたが、精気を吸い取られたような気がするの、何もタロヒュージだけではない事はマキシマスにもわかっていた。あるうことが、春夏秋冬の花嫁候補が全員フレイアの魅力に堕ちた。たかだか一週間放っておいただけなのに、確実に侵食されている。しかも、タロヒュージの花嫁候補達が揃って、その花嫁候補に喰われたらしい。

哀れとしか言いようがない主の背中を見ながら、まだ到着していない月の花嫁候補がここにいないくて良かったと内心ほっとしていたのも事実だ。

本当は最初から決まっているようなものなのだ。月の花嫁候補を王妃に据えることは。

ただ、各長官らが煩いのと、一種の娯楽として花嫁候補を集めたに過ぎない。まあ、そこに各自の思惑が隠されているのはご愛嬌である。

春夏秋冬の花嫁候補達は各々、何らかの形でタロヒュージに恩恵をもたらす事になっている。例えば王妃になることはなくても、側妃として残せば問題はない。

春のオフィーリアは、土地取引に関する内密な情報を。

夏のイヴは、隣国との軍事同盟と言う不可侵条約を。

秋のサマンサは、一部法令の簡素化、並びに一部権限を王への譲渡を。

冬のイザベルは、過剰な武器の放出と、新たな武器購入の予算を冬庁から出させる事を。

しかし、星のフレシアには何も望んでいない。元々星庁には国政に携わる権限が無いのだが、全庁が花嫁候補を出すのだから、星も出さずにはいられないので、ヴァルハラ为国政には全く関与出来ない異世界から償還することにしたのである。それを言うとも月も同じなのだが、タロヒュージが無理矢理、月の候補に自分が思っている娘

をねじ込んだのである。勿論秘密裏に。

勝敗は端から決まっているのだ。どんなに足掻いたとて、それが変わる事はない。精々、タロヒュージを巡って女の醜い争いをしていれば良いと思っていた。

——それなのに。

「ちょっと！お姉さまに近寄らないでよ！！」

「煩い、小娘！！」

「まあ、きやあきやあとかしましいですわね。フレイア、わたくしの部屋に行きませんか？」

「まあ、オフィーリア、一人だけ抜け駆けは許しませんわ？」

タロヒュージを巡って起こるはずだった醜い争いが、フレイアを巡っての醜い争いに変わっている。そこに、ヴァルハラ王であるタロヒュージのタの字もない事が信じられない。哀愁すら漂うタロヒュージの背中を見つめながら、マキシマスはひっそりと涙を流した。

15：魔獣と初対面（前書き）

フィクションです。何が何でもフィクションです。

15：魔獣と初対面

「太郎ちゃん、あたし暇だから魔獣ちゃんに会いたい。て言うか捕獲に行きたい！」

「何だ、藪から棒に。魔獣なら厩舎にいるぞ。今人を」

「よっしゃー！許可出たー！！待っててね、魔獣ちゃん！！！！」

マキシマスの静止を『邪魔だからどけ』の一言で軽快に沈め、フレイア付きである新人近衛兵を置き去りにしてさっさと厩舎に走り去った後ろ姿を見て、タロヒュージとジローリアスは嘆息した。

「そろそろ彼女が来ると言うのに、なんと騒がしい…」

「陛下、それよりも彼女のお気持ちがフレイア様に向いたら如何します」

「断じてありえん！！」

まんざら有り得なくもない事を口走った宰相をギツと睨み付けたタロヒュージは、何やら気配が白くなっているマキシマスに声をかけた。

「フレイアが厩舎に行ったが、余の魔獣に近付かないように言って

あるのだろうな」

「係がいるから大丈夫でしょう。万が一、フレリア様が近付いたとしても、抑制輪もしているので大丈夫だと」

「……いつそのこと、バクリと一息で喰ってくれないものかな……」

ぼそりとタロヒュージが放った不穏な言葉を、その場にいた誰しもが聞かなかった事にして粛々と仕事を続けた。

一方、喰われればいいのと言われたフレリアは、意気揚々と厩舎への道を颯爽と歩いていた。

道中、何人か女官が自分に見惚れていたのに気付き、手を振り投げキスのサービスまで付けてやった。当然黄色い声が上がったが、今は魔獣の方が最優先だ。キヤーキヤーと言う姦しい声に後る髪を引かれつつ、厩舎への道を急いだ。

フレリアは道案内を付けてはいない。

何故ならば、城の内部をとくに覚えてしまっているからである。蔵書室に置いてあったのは、歴史書の類だけではない。何故か城の内部の事が書かれた蔵書なんかもあり、城が出来た時の設計図に似たものがあつたので、それを紐解いて行くうちに、現在の城の内部がなんとなくだが把握出来たのだ。百聞は一見にしかずと言うが、足りないものは自分の優秀すぎる頭脳で補う。それで足りないのならば、行動あるのみ。

幸いにして、フレリアは異世界『地球』では特殊部隊顔負けの実戦経験を積んでいる。拉致・誘拐なんぞ可愛いもので、毒殺・暗殺の

類はこの年で腐るほど体験している。当然ながら『目には目を』のハムラビ法典を絵本代わりにして育ったフレイアは、自分を狙った暗殺者や誘拐犯、拉致犯の実行犯は勿論、雇った人間を一人残らず見つけ出し、自分に歯を剥いた愚かさを身を持って償って貰った。すなわち、報復という名の制裁を。

勿論、イギリスのSASのキリングハウス、アメリカ陸軍^デ第一特殊作戦部隊^{ルタ}D分遣隊（通称：デルタフォース）、同国特殊作戦軍（通称：U.S.SOCOM）等、世界各国の特殊部隊の訓練過程も受けた。当然、何回か実践にも参加した事がある。女、子供にも容赦しない男の部隊だろうがなんだろうが、フレイアはその身一つで全て蹴散らしてきたのである。何せ自分の教育担当官は、旧ソ連特殊部隊スペツナズの出身者だった。生きるか死ぬか、幼少時からお釣が来るほど身体の中に染み付いている。勿論それだけではなく、KGBのザスローン部隊出身者もいたのだが。

「ニコライも元気してるかなー」

鼻歌交じりで厩舎へ向かう道すがら、昔の教育担当官だった男の顔を思い出しながら、フレイアは微笑んだ。

「ここが厩舎？」

「これは…このような場所に候補様がいらっしゃいますとは…」

「始めまして、フレイアよ。魔獣ちゃんがいるって聞いたから、是非見せてもらいたくて。ね？いいでしょう？」

につこりと艶然と笑んだフレイアに、あわあわと慌てふためいた厩舎係は、こちらですとどもりながらフレイアを厩舎内に案内して行く。その後をポチが着いてくるのだが、ビクビクしていて全く意気地がない。イラッとしたフレイアは、愉しみにしている魔獣ちゃんとお楽しみを邪魔されてはかなわないとばかりに『そこで待ってる』と一喝した後、うきうきと先立ちの厩舎係の後に続いた。

「この子が魔獣ちゃん？思っていたより小さいのね」

「これは全体的に体が小さい種族でして、その分凶暴性も少ないので、愛玩として飼われることが多いですね。騎乗用となるとこれよりも体が大きく、また凶暴性も増します。タロヒュージ陛下の魔獣、『フェンリル』がこの世界では最速で、強いとされています」

「フェンリル…ねえ…」

灰色で、ふわふわした小さなウサギのような魔獣を手に抱き上げて、ころころと撫でくり回す。凶暴性が少ない言われた通り、人に対しての警戒感が少ないように思える。撫でまわされるのが心地よいのか、もつともつと自分から体を押し付けてくるのを微笑ましく思いながら、説明している厩舎係の話を聴く。

タロヒュージが持っているらしい魔獣『フェンリル』がこの世界で最強のはわかった。

という事は、体も大きく凶暴性も強いという事もわかるのだが、どうやら制御する『抑制輪』なるものが付いているらしい。そんなものが無ければ、もつと強くなるのではと思ったが、この厩舎に入っているときだけ付けるのだそうだ。

「へーえ……。ねえ、あたし、そのフェンリル君をみ「いけません、それだけは後勘弁を！」……まだ最後まで言ってないじゃない」

「フェンリルは、陛下以外懐かれてはおりません。もしも、フレイア様がお怪我でもするようなことになったら……」

「えー？別にあたしはいいのに。ね、どこにいるの？」

「駄目です！」

「けーちいいいー！」

「何と言っても、これだけは譲れませんので。御容赦下さいませ」

ちつと舌打ちをしたフレイアを引きつった顔で見ながらも、やはり譲れないらしい。

仕方ないと思い、ふわふわした魔獣を下ろし、ふと奥の隔離された部屋に目を移す。

ピリピリとした空気がそこに漂っている気がする。ああ、あそこがフェンリルがいるという厩舎か……。にやりと笑って、厩舎係を見据えた。ひっと息を飲む音が聞こえたが、鮮やかに首に手刀を入れて意識を奪うと、一人その殺気交じりの空気がする方へと歩いて行った。

「フレイア様はどうした」

「マキシマス様…それが…」

「一人で入ったと！？何で追いかけなかったんだ！！」

「だって、僕魔獣怖いんですもん…」

「この馬鹿！戻ったらシゴキが待っているのを忘れるな！行くぞ！
！」

急いで厩舎内へと入ると、小型の魔獣の傍らで厩舎係が倒れているのを見かけて、マキシマス以下、ざっと血の気が引いた。意識を失っているらしい男の頬を叩いて覚醒させると、呻き声をあげて目を開けた。その瞬間、「フレイア様がつ！」と叫び飛び起きたのだが、直ぐに床にくず折れた。

「おい、フレイア様はどこにいる」

「…ふえ…フェンリルの部屋に…」

「ちっ！最悪だ、おい、お前、こいつを頼むぞ！」

「まさか、行くんですか！」

「仕方ないだろう！！くそっ！」

フェンリルは抑制輪を付けていても、凶暴なものには代わり無い。最

悪、腕の一本で済めばいいと覚悟しながら、フェンリルの部屋へと近づいて行く。

部屋までの短い道は、相変わらず殺気交じりの空気が蔓延している。びりびりとする空気を振り払うように、一呼吸すると、一気に部屋へと突入した。

「あれ、マッチョ隊長。どうしたの、そんな血相かかえて」

「……フレリア様……？あの…フェンリル……」

「ああ、フェンリル君……ていうか、フェンリルちゃん？あのさー、フェンリルちゃんって、」

「いや！貴女は何をしているんですか！！」

「え？遊んでる。ねー？フェンリルちゃん」

グルグルと喉を鳴らせてフレリアに擦り寄っているフェンリルは、いつもの様な殺気じみた雰囲気をしていない。それどころか、タロヒュージに甘えている時よりも甘えている。

自分以外の花嫁候補を手玉に取っただけでは飽きたらず、最近では城で働く女官にまでフレリアの名前は知り渡り、『フレリアに会えれば一日良いことがある』とまで言われ、女官達にもじわじわとフレリア熱が高まってきている。

それだけでは無く、まさか魔獣まで。しかもタロヒュージ所有のフェンリルまでフレリアの魔手に落ちるとは…。

フレリアが女で良かった。

これが男だったら、女泣かせの異名をやらなければいけないところだ。

しかしながら、タロヒュージ以外に懐いていなかったフェンリルまでもがフレイアの手に落ちた今、ますます事態はややこしくなってきたのではないか。

これでタロヒュージの本命が城に来た時、さっき戯れでジローリアスが言った事が現実に成り兼ねない。ぞつとするのと同時に、ここでフレイアを邪険にすればもっと悪い事が起きるのではないかと不吉に思った。

マキシマスは、なおもグルグルとフレイアに擦り寄って懐いている大型の魔獣のフェンリルがタロヒュージの言ったように、バクリと喰ってくれないものかと本気で思った。

15：魔獣と初対面（後書き）

SASなどの特殊部隊は実在しています。勿論、ザスローン部隊も本当はNavy SEALsも入れたかったんですが、まさかこの次期に…。って感じで見送りです。

16：妥協とはなんぞや（前書き）

ダンスが出てきますが、私はダンスに関してはさっぱりで…知識がないまま書いているもので、間違っていたらすみません…。あくまでもフィクション、フィクションだと思ってください。

ちなみに、今回少し長くなりました。

16：妥協とはなんぞや

城中の女子のハートをことごとくその手中に修め、はたまた魔獣までもを虜にする女、フレイア。

しかし現在、そのフレイアはいたくご立腹であった。

なぜなら…

「だから、半拍動くのが遅いって言うてんのよ！右足出すタイミングが遅い！！何回言ったらわかる！！」

その美しい顔を歪めながらもその美貌を衰えさせず、しかし怒号を響かせ、城の主であるはずのタロヒュージのダンスのレッスンを行っていた。

事の発端はこうである。

「お披露目会？なにそれ。」

「来月は陛下の即位10年目の節目の年になります。その為に花嫁候補の方々を国内外にお披露目を…という事であります。」

「ふうん…。」

タロヒュージの即位10年の記念式典が来月に行われるに当たって、それまで内密にとされていた候補を一同に集めて、国内外の王侯貴族にお披露目しようという知らせが宰相からもたらされた。

即位10年にしては暗殺未遂とかされているし、いろいろと締めるべきところが締まっていなと思うフレイアだったが、一つ引つかかった事がある。

春夏秋冬の候補は全員揃っているし、星の候補だと言う自分もいる。皆まで言われなくても気が付く。月の候補がまだ到着していない。もししているのであれば、この城の一室にいるだろうがそう言う話は聞いていなかった。

「ねえ、次郎さん。月の候補がないけど、それはいいわけ？」

「…あのお方は式典直前ではないと到着しないと報告を承っております。」

「ふうん…。ま、いいや。それで？どんな式典になるわけ？いちいちあたしに教えに来たんだもの。何かあるんでしょ？」

『彼女』の事を深く詮索されなかった事に内心安堵しながらも、フレイア相手に安心は出来ない。気を緩める事無く、彼女の質問に答えに行くジローリアス。

「祭典は二日に渡って行われます。式典前日には、宮中での晩餐会と舞踏会、当日には城のバルコニーにお出になってもらいます。そこで民にもお顔をお見せになっていただくのです。」

「誰かが王妃に選ばれるのに、皆が民に顔見せするわけ？それって選ばれなかった人はとんださらし者じゃないー？」

「そう言うわけではございません。もしも王妃になられなかった方でありまして、その方には陛下の寵室になれる機会が与えられます。」

「婚姻したばかりなのに、もう寵室？どれだけ節操ないのよ。」

きりりと放たれた矢がジローリアスに刺さる。その矢を放ったフレイアはと言うと、小さな愛玩用の魔獣をここに遊ばせている。さながら、小さな魔獣たちの女王であるかのように、彼等はフレイアに纏わり付いて離れない。それを嫌がる素振りを微塵も見せず、むしろ好きにさせてやっている彼女の意外に深い懐具合に関心しながら、宰相は話を続ける。

「王は…王家は、」

「ああ、わかってるわよ。子孫を残さなければいけないんでしょう？あたしだってそれは理解しているわ。ただ、寵室を持つなら少しばかり機会を考えて欲しいわよねー。って事。王妃云々と寵室が一緒くたになってるんだもの。傍目に考えてみればおかしいんじゃないの？ってことよ。ま、端からあたしは選ばれる気なんてさらさら無いし、寵室になんて土下座されてもごめんだけどね。」

さらっと聞き捨てならないことを聞いたような気がする。しかし、それも聞かなかった事にする。宰相たるもの、スルー能力にも長け

ていなければ務まらない。

一方スルーされたフレイアにしても、そう大した気にもしていなかった。というよりも、何故そんな事をいちいちジローリアスが言いに来たのが疑問だった。

「次郎さん、もういいの？ だったら早く戻んなさいな。仕事が溜まっちゃうわよ。」

「お氣使いありがとうございます。つきましてはフレイア様、ダンスはお出来になりますか？」

「ダンス？ 種類は？」

「ワルツでございます。」

「踊れるわよ。と言うか、社交ダンスは全部踊れるわ。」

ラテンだって踊れるのよ！！と言っても、この世界にラテンを踊れる人がいるのかどうかはわからない。いなかったとしたら、自らが広めてもいい。情熱的なラテンの風をこの世界の人達にも体感してもらわねばもつた^{ほこはし}たいのではないか！！

情熱^{パッション}を人知れず^{ほこはし}進らせるフレイアを尻目に、ジローリアスはほっと息を付く。

「前夜祭では陛下主催の舞踏会が行われます。そこで、候補の方お一人ずつ陛下と一曲踊っていただきます。フレイア様は踊れるということでしたので、教師をお付けしなくても大丈夫でございますか

「？」

「平気よ。あ、でも教師って言うのはちょっと必要ね。最近全然踊ってなかったから、鈍っているかもだし。」

「左様でございますか。ではこちらで手配を。」

「身長はあたしより大きい人をお願い。それと、あたしに男性用の服を用意してもらえないかしら。」

「…身長はともかく…、何ですか、その男性用の服とは…」

「あたし、男役も踊れるの。」

しれっと笑顔で答えたフレイアだったが、ジローリアスはどうしたものかと悩んだ。

はつきり言って、男性用の服なんぞ着せたらまた城中の女子達がフレイアに靡いてしまう。それは阻止しねばならない。

しかし、敵もさるものながら、宰相がはいと頷く前に侍女であるヴィクトリアにあっさりと男性用の服を差し出させたのである。しかもそれは、タロヒュージの第一級礼装ではないか！

「それは陛下の…っ！！」

「あら、そうなの？ヴィクトリア、どうしたの、これ。まさか盗ったの？」

「違います！フレイア様、それは私に対する侮辱ですわ！！これは

陛下の衣装係から拝借したものでございます。断じて盗んだわけではございません!!」

「そう言う問題ではないだろう!!」

「とは言え…ね、次郎さん。ごめんなさいね…。…でもさあ、太郎ちゃんって、腰細くない…?」

しげしげと服を見つめるフレシアは、盗ったどうのこうのより、服そのものが気になるらしい。しかもサイズ。

いよいよ頭が痛くなってきたジローリアスは、次いで開けられたドアの大音量に再び顔を顰めた。

そこにいたのは金髪の髪を振り乱し、ゼーゼーと息を切らしている自らの主…タロヒュージ国王である。

「フレシア!!余の服を返せ!!」

「あら、太郎ちゃん。」

「『あら、太郎ちゃん』ではない!余の服を勝手に持ち出すな!おい、ヴィクトリア!!そもその原因はお前か!!」

「私の主はフレシア様です。陛下ではございませんわ。それに、侍女として、主の願いを叶えるのが私の仕事ですもの。何か文句がございますか?」

「貴様…っ!不敬罪と窃盗罪で牢に叩き入れるぞ!」

「まあまあ、太郎ちゃん。ちょうどいいところに来たわ。ダンスの相手して頂戴。ここに来たって事は暇なんですよ？どーせ。」

怒っているはずなのに、なんだろう。この虚脱感。

相変わらず第一級礼装の服はフレイアの手にあるし、しかも暇だと言われたもんだ。

暇ではない。暇ではないのだが、国王付きの侍従から衣装がないと言われて侍女を問い詰めてみたのだ。それから明らかになった真実……。フレイアの願いを叶えるためにヴィクトリアが女官長に頼みこんで、当初は何を言っているのだと一蹴したらしい。しかし、ヴィクトリアから耳打ちされた一言でその鉄の意志も熔解してしまった。

「女官長様はこの第一級礼装を着たフレイア様が見たくないんですか！？」

と。

その悪魔の一言で、真面目で有能、融通が聞かない事で有名な女官長はおずおずとタロヒュージの服をヴィクトリアに渡してしまったようだ、ちなみに、思いもがけずその場に居合わせた女官、侍女達はその女官長の行動に拍手で声援を送ったらしい。

その後、正式なお披露目会という場なので衣装合わせ的な日程が組まれ、タロヒュージが衣装室に赴いた際に今回の事件が発覚したのである。

「まあまあ、女官長を怒らないであげて。彼女は何もわるくないじゃないの。あたしがこの服を着たところを見たかったんでしょ？　だったら仕方がないじゃない。」

「『ないじゃない』ではない！！余の衣装が無いのだぞ！しかも第一級礼装が！国の大事で着る大事な物だ、フレイア、お前がおいそれと着れるものではないわ！！」

「はー…うるっさい男ねえ。そんなカリカリしてたんじゃ将来ハゲるか、高血圧でぼっくり逝っちゃうわよ。ま、仕方ないわね。ヴィクトリア、その服、太郎ちゃんに返してやってくれる。その代わり、太郎ちゃん、一曲踊ってくれるかしら？」

「は？」

「舞踏会の練習よ。私最近踊ってなかったら身体が覚えているか心配で。さ、太郎ちゃん。」

「…仕方が無い。一曲だけだぞ。」

そう言つて、部屋の中央にフレイアの手を取って移動したタロヒュージとフレイア。

曲がないので、あくまでもタロヒュージのリードに任せる体で二人でワルツを踊る。その様はまるで、お伽話に出てくるような優雅さで、思わず居合わせた面々はほう…と感動のため息を吐いた。特に女性陣、ヴィクトリアといつの間にか見に来ていたイザベルやオフイーリア、サマンサ、イヴも二人を（主に、というかほとんどフレイアのみ）キラキラと羨望の眼差しで見っていた。他の女官や侍女もいた事はあえて割愛。

タロヒュージにしても、いままで美しいと思っていたフレイアがこんなにも近くににいるのは初めての事で、やはりその顔が近くにあると言う事で彼女の顔を穴があくほど見つめていた。

いつもいつも自分を怒らせて、呆れさせて、驚愕させてばかりいるフレイアだが、黙って踊っていれば極上の女だというのはわかる。

今は節目がちになっている色の違う両目も、その絶対的な美しさを更に引きたてるものとして重要で、しかも踊っている最中のために身体が密着している。その感触もやはりいい。いつもであれば女を侍らせ高笑いをしているようなフレイアだが、別に男が嫌いだということとは言っていないかったし、王妃が決定した際には寵姫の打診も本格的にしてみようと思う。

そんな事をつらつら考えていたタロヒュージは、フレイアの機嫌が急降下しているのに気付かなかった。

「もういいわ。」

「いいのか？では余はこれから、」

「下手くそすぎて一緒に踊ってるとイライラしてくる。」

「「は？」」

「ごまかすように自分の下手さを誤魔化してる感じが本当小ざかしいって言うか。普通なら気が付かない程度かもしれないけど、あたしの目と身体は誤魔化せないわ。太郎ちゃん、あなた半拍遅れてる。」

半拍…。

まさか自国の王であるタロヒュージのダンスが小ざかしいと貶されると思っていなかったジローリアスは、すぐさまそれを否定するかのようになり、食い気味でフレイアに反論した。

「いいえ、フレイア様。陛下はとても上手に踊られていましたが。」

「上手？馬鹿も休み休み言いなさい。半拍。半拍なのよ。半拍遅れてくせにリードしようなんてちゃんちゃら笑わせるわ。いい？ダンスは男性のリードで女がそれに着いて行くようになってるの。それなのに男が下手なんて…終わってるわ。こっちが逆に恥かくじゃないの。」

「…っ！言わせておけば…！！じゃあお前が見本を見せてみる！！それが手本になるのだったら余はフレイア、お前にダンスを手ほどきしてもらおうではないか！！」

「上等。じゃあ、あたしが男性役、女性役は…っ。身長的に…ヴィクトリ「お姉さま、わたくしが！！」「まあ、フレイア私ですわよね！？」「フレイア、そんな悲しい事言わないで。私ですわよね？」「私！！絶対私！！」

はいはい！！と手を上げてきた女性達は凄惨な数にのぼってしまい、結局はじゃんけんで誰がフレイアのパートナーになるのか決める事になった。壮絶な戦いがあったことは割愛し、最終的な勝者は当初の通りヴィクトリアになったのである。恨みがましい女性達の怨念交じりのじつとり視線を肌で感じながらも、勝ち誇った笑みを浮かべたヴィクトリアは、ようやく愛しの主の元へとはせ参じた。

「あたし今着てるの動き難いのよね…。太郎ちゃんの服着れないし…仕方ない。ポーーーーーチ!!」

「はいっ!!お呼びですか、フレイア様!!」

「脱げ。」

「はははいいいい!!?」

「その近衛の制服全部脱げ。あたしがその服着るから。」

「嫌ですうう!!すみませえん!!!!」

「ポチ!!脱げたら脱げ!!ご主人の命令が聞けないの!!」

「あ、やつ!!フレイア様!!脱がさないでくださいよおお!!!!いやああーーーー!!!!!!」

結局。ポチは抵抗空しく脱がされたものの、今度はフレイアの身体に合わない。股下が短すぎるのだ。つんつるてんな服を哀れに思ったのか何なのか知らないが、その惨劇を目の当たりにし、根負けしたタロヒュージが自分の服を差し出した。
きゃーーーーっつと悲鳴を上げた女性陣を尻目に、フレイアは着替えるために一旦部屋を出た。

「陛下、よろしいのですか…」

「一度だけだ。それに、余のダンスが半拍遅れているだと。笑止！余のダンスは講師らからも絶賛されているというわー！」

「左様でございましたね。しかし、半拍となると気付くか気付かないか程度なのでは無いのでしょうか。それに、誰もそこまで見ていないと思われませんがねえ……」

「はっ！精々フレイアも恥をかくといいのだ！！」

結果。

第一級礼装を身にまとったフレイアが部屋に入って来るや否や、失神者続出。更にはダンスをしたヴィクトリアも最後まで踊ったものの、その記憶は曖昧でほとんど何も覚えておらず、イザベルらも全員が一度は相手になったのだが見惚れてしまってステップどころの話ではなかった。

それにも関わらず、やはり男性役も出来ると豪語したフレイアのステップとリードは完璧で、フレイアの色香に惑っていた彼女達全員はその確かなリードのお陰で最後まで踊りきる事が出来たのである。

「いい、わかった？全員ステップが踏めなくても男性がリードさえしてればようは上手く見えるの。それなのに、太郎ちゃんのダンスと言ったら……自分よがりな感じで……ケツ！て感じよね。」

「ぐう……っ！！半拍ぐらいは許容であろう！妥協せぬか……！」

「妥協……？妥協って何それ。どういう意味？」

「妥協も知らんのか！やはりお前は、」

「妥協なんて言葉はあたしの辞書、いいえ、このパーフェクトな脳髓のどこにも存在しないの。いい？妥協なんてものは存在しないのよ！？太郎ちゃん、このあたしに『妥協』なんて言葉でいい加減な事やってみなさい。その言葉を発した事の愚かさを身を持って体感していただくわ。」

その宣言どおり、フレイアの地獄の特訓は夜を徹して行われ、タロヒュージがダンスから解放されたのはそれから二日後の事だった。

17: in the night (前書き)

かなり短め。しかも、フレイアが出てきません。

17: in the night

「『彼女』が何処にいるのか、まだわからないのか!!」

深夜…いや、この部屋自体が暗く閉ざされている為、ここにいる人間は久しく陽の光を見ていない。

そんな暗く閉ざされた部屋の中、何人かの人影が数十台もあるコンピューターやモニターが作り出す人工的な光を浴びて激しく言い争っていた。

「だからー！今懸命に探してるって言うてんでしようが！！何もしないで脇からごちゃごちゃ言わないでくれない!？」

「なんだとお!？」

「大体さ、『あの方』がシャワー浴びるって言うて出て行った時の警備ってあんたでしょう？油断してたんじゃないのー？」

「そつ、それは…だが何も異変はなかったんだ！物音一つ…」

「『我等が主』が物音一つ…いや、気配すら無きまま任務を遂行するのはお前も承知しているはずだ。忘れたとは言わせないぞ」

「ぐっ…」

悔しそうに口を噤んだ男を鼻で笑って一瞥し、いままで見ていたモ

ニターに再び視線を戻す。

何度見ても、何度調べてみようと自分達が追い求めている人物の存在を示すものはない。

「くっそ、駄目か…。なあ、ノワール…」

「なんだ」

「『あの方』の生体反応はあるんだよね」

「そつだ。だがGPS信号がない」

「『彼女』が自分で取ったと言っ事は…」

「『ない』ね」

二人揃ってそれを否定する。

「大体『あの方』のGPSって、あんだってどこに埋まってるか知ってんでしょ？自らあんなところに埋め込んだ『あの方』でなきゃ絶対取れない」

「それに、常にGPS信号を発信していても俺達のIDとパスワードと生態認証。全て揃っていなければ位置情報を割り出せないことになっているだろう。だが、信号自体が確認されないんだ。俺達の情報網を持っとしても何処に入るのかわからん」

「……だったら一体何処に……」

追い求める人物の生態反応だけを示すモニターを睨むようにして、人影達は再び『彼の人』を探し出すことに戻った。

18：コルセットはコルセット、見た目は見た目

フレイアの悪鬼のようなダンスのしごきに耐えに耐えたタロヒュージは、半月後の舞踏会を前にして既にぐったりと披露困憊していた。

いつもであれば多数の貴族令嬢やらが彼がダンスを申し込むのを、早く早くとももも…と後ろで効果音が鳴ってそうなほど凄まじい形相——と言っても表面上の笑顔の下で——で待っているのだが、花嫁候補と踊ることになっている今回はそれはそれがなさそうだと安心していた矢先のこの仕打ち。正直もうダンスのステップを踏むのも嫌である。

傍らで見ていたマキシマスもあまりの熱心な練習（地獄の特訓）に同情はしたものの、自分が巻きこまれるのは嫌だったので黙っていることにしたのだ。一回、政務に差し支えがあると言ってジローリアスが注意した所、彼が巻き添えを食ってあえなくフレイアに『木偶の棒』と言われた経緯があり、それからしばらくわが国の宰相はフレイアの前に出てこなくなった。

とは言え、あれだけの特訓に耐えぬいたタロヒュージのダンスの腕前は、以前より確実に上がった。フレイアに『小手先だけで踊っている』と評されたそれは、指先からつま先まで完璧になった。もつとも、それでなければフレイアが『よし』と言わないのであるが…。

「…誰だ、ダンスを踊ろうなんぞと言いだした奴は…」

「存じません」

「…おい、そう言えばジローリアス、お前確かフレイアに木偶と言われていたな」

「……ちっ……陛下、政務が滞っております。さっさと仕事してください」

「おい、今舌打ちしただろう。八つ当たりは止める」

「陛下もです」

そう言つて、国王と宰相はお互い疲れ切つたため息を吐いた。

さて、その頃フレイアはと言うと。

「わかつていたけど、やっぱりコルセット着用なのねー…ぐう！」

コルセットと格闘していた。

と言うのも、フレイアのドレスの仕立てが間に合わなかったために、タロヒュージに言われた通りに城にある服に袖を通していたのである。

ドレスの仕様上中世のそれと同等な為、やはりコルセットを使用せねばならず、現代地球で身体を締め付ける服を嫌っていたフレイアはコルセットを見るなりげんなりとした息を吐いた。

しかしいくらコルセットを嫌っているとは言え、あちらの世界でも何回かは付けたことがある。

本当に、極、稀に。

その時に着ていたのは、今回の中世らしいブリブリッとしたドレスではなく、服と呼ぶには少々布が足りない過激すぎるものだったのだが。

いくらドレスが好きだろうが、こつも長時間コルセットに締め付けられていると、本気で疲れる。いい加減うんざりとしたフレイアの疲れた顔を哀れに思ったのか、ヴィクトリアが「お茶にしましょうか」と言って、コルセットを締め付ける手を休め緩めると、フレイアは心底ほっとした表情になった。それに苦笑しつつ、ローブを羽織らせたヴィクトリアはお茶の用意をするために部屋から出て行った。

ヴィクトリアが出て行ってから何分も経たない内に、ドアをノックする音が聞こえ、フレイアは眉を顰めた。

足音がヴィクトリアやオフィーリア達のものとは違い、重い。かと言ってタロヒュージやジローリアス、勿論下僕のポチのものでもなかった。

では誰か？

その答えを知る為には、自らドアを開ける事以外無かった。まあ、間違っても侵入者にどうのこつこのされえるようなフレイアではないし、逆に返り打ちにあうのが目に見えているのだが。一応念のため、ドアの向こうに声をかけてみると返事があった。

「どちら様？」

「月の長官、マーカス・ビスマルクでございます。急ではございますが、今日はフレイア様と詳しい話をする機会だと。よろしいでしょうか」

「…それって拒否する事を初めから排除した申し出よね。まあいいわ。入って頂戴」

「はい。失礼します」

静かに開けられたドアから顔を覗かせたのは、あまり背の高くない気の弱そうな初老の男だった。髪は黒なのに白が混じっているという事は、単にソレは白髪なのだろうが、逆にそれが年を解りにくくしている。

フレイアは尚も観察する。

月の長官だと言う事は、自分をこちらの世界に呼んだ召喚長の所属している庁の一番偉い人物なはず。にも関わらず、この気の弱そうな風貌はどうした事だろう。確か春夏秋冬、それに星月という庁が存在していて、春夏秋冬は国政に絡んでいる。しかし、星と月は国政ではなく王家に関わっているらしいが、それといった権限はないらしい。

とは言え、いくら権限のない庁であろうと庁は庁。しかも目の前にいる気の弱そうな、現代日本の草臥れた悲哀交じりの中年サラリーマン（万年課長で恐妻家。娘はイケメン彼氏を優先し、息子は「俺オヤジみてーにはなりたくねえ」が口癖）のようなのでは駄目だろう！

しかもビスマルク！！

帝政ドイツの鉄血宰相ビスマルクの名前を掲げて置きながら、なん

たること！

フレイアの頭の中では有名な鉄血宰相ビスマルクの肖像画が浮かび、目の前の気の弱そうなビスマルクとの比較に、彼女の完璧な頭脳がまさかの『エラー』表示を示していた。

フレイアは思わずテーブルを叩きつけると、

「ちょっとそこ座れえ！！」

と一喝した。

18:コルセットはコルセット、見た目は見た目（後書き）

あくまでも私の偏見（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0960q/>

フレイアの娘

2011年11月3日20時27分発行